鈴木くんの平均的な非日常

立川マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈴木くんの平均的な非日常

【Ｎコード】
Ｎ６３２５Ｒ

【作者名】
立川マナ

【あらすじ】
なにもかも平均的な中学生、鈴木少年。大して目立つ特徴もないし、特技もない。卒業を間近に控えた中学生活も、このままでは「平均的」に終わってしまう。そこで、鈴木少年は決意した。
そうだ、学校のアイドルに告白しよう、と。しかし、どうやって？
そんなときに出会ったのが、『がっかりイケメン』こと藤本くん。
噂通りのイケメンだが、噂通りの『変人』だ。それでも、鈴木少年は「平均的な日常」から脱するために、『がっかりイケメン』の力を借りることに……。青春ドタバタコメディです。

＊『Ｓｍｉｌｅ　Ｊａｐａｎ』参加作品です。ｈｔｔｐ：／／ｓｍｉｌｅｊａｐａｎ．ｄｏｕｓｅｔｓｕ．ｃｏｍ／

平均的な春の朝（前書き）

表紙絵を頂きました！　なんて、なんて、素敵な・・・・・・もう感動ですっ。Yさま、ありがとうございました！！

平均的な春の朝

＞i３０４１８―１３９３＜

卒業式も間近にせまった春の日。窓の外では、桜の木が桃色の晴れ着に身を包み、生徒たちの門出に備えていた。

そんな桜の木を窓辺で見つめる少年、鈴木もまた、門出をひかえた中学三年生だ。

受験も終えて、教室には緊張感はなくなった。暢気に騒ぐクラスメイトの声が朝の教室に響いている。

しかし、鈴木は一人、物憂げな表情を浮かべて頬杖をついているのだった。

彼の頭の中に浮かんでいるのは、これから始まるばら色の高校生活ではない。ふわふわと彼の妄想……いや、思考の海に漂うのは、春がよく似合うしとやかな美少女だ。

この中学校のアイドル――藤本砺波（となみ）。

彼女に憧れ続けてはや二年。高嶺の花だ、と諦めても、つい目で追ってしまう。廊下から聞こえる高らかな笑い声に振り返り、通り過ぎる彼女の髪の毛一本まで見送った。優雅で上品で、それでいて、同い年とは思えないほど愛らしい。

小学生のような幼い顔立ちに、ウェーブがかった長い黒髪。セーラー服のスカート丈は反則並みに短くて、生活指導の小倉（男）もつい見とれてしまうほどのほっそりとした長く白い足をおしみなく披露している。ありがたいことこの上ない。この学校では、もはや名物だ。

そんな彼女と出会ったのは……いや、大して言及するべきことで

もないのだが。売店で、財布を忘れた、と騒ぐ彼女に千円を貸し、それ以後、ストーカーのようにその姿を目で追っている。

よくある話だ。

たった一言、「あのときの千円、返してくれるかな」とかなんとか言えば、話すきっかけがつかめるというものなのだが、彼にはそれが出来ない理由があった。

鈴木はじっと窓を見つめていた。——正確には、そこに映る自分を。

頭はいいのだ。とくに、数学は得意だ。定期試験だって、毎回、十五位あたりをさまよっている。

しかし、勝負運がない。だからこそ、第一志望の県立高校の受験に失敗し、眼中にもなかったすべり止めの私立高校にも失敗し——残ったのは、名前を書けば受かる、と言われている私立の不良高校だった。

鈴木は鼻で笑った。もはや、笑うしかない。

この勝負運の無さは、勉強に限ったことではない。体育祭でも、その持ち前の勝負運の無さを発揮して、クラスの批難は一極集中だ。だから、運動能力自体は平均なのに、運動オンチのレッテルを貼られてしまった。

平均といえば、彼の見た目もそうだ。保健の教科書に描かれるイラストのような、一般男子の体系。中背中肉。顔は目立つわけでもなく、かといって、ブサイクでもない。おそらく、ランダムに三十人ほどの男子生徒の顔写真を用意して、その平均値を割り出せば、彼の顔になるだろう。似顔絵が描きづらい顔、といえば分かりやすいだろうか。とにかく、特徴がない。だから、なかなか覚えてもらえない。それなのに、しょっちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

そんな鈴木にとって、砺波は手の届かない存在でしかない。それ

が、彼が砺波に声もかけられない理由である。

だが……

鈴木は机の上でぎゅっと拳を握りしめる。

鈴木は自問していた。――このまま、卒業していいのか、と。

彼の人生は、平均的だった。際立っていることといえば、その勝負運の悪さくらい。このまま卒業すれば、中学生活もやはり「平均的だった」で終わってしまう。

いいのか。それでいいのか。

当たって砕けるくらいの度胸を見せてこそ、男じゃないか。ここで勝負せずに、いつ男になるのだ。

鈴木はぐっと固く瞼を閉じて――そのときだった。

「おい、田中！　よけろ！」

誰かの野太い叫び声が聞こえてきた。

田中？　そんな名前の奴、クラスにいただろうか。

平均的な保健室

あ、そうか。俺のことか。って、誰が田中だ。俺は鈴木だ！　――心の中でそう怒鳴り、目を開いたときにはベッドで横になっていた。

むくりと起き上がろうとするが、後頭部に痛みが走ってそのまま頭を枕に戻す。

ぼんやりと天井を見上げる。視界のすみでカーテンがまわりを取り囲んでいるのが確認できる。ここが保健室であることを認識するのに時間はかからなかった。

どこからか、号令のようなものが聞こえてくる。続くホイッスル。運動場で体育でもしているのだろう。

ということは、授業は始まっている。何時間目なんだろう。いや、その前に何が起きたのだろうか。鈴木は思い出そうとするが、誰かの怒鳴り声しか覚えていない。そのあと、目の前が真っ暗になって、気づいたらここにいたのだ。

後頭部にそっと手をのばす。髪をかきわけて痛むところを探す。

「いてっ……」

思わず、声がもれた。

後頭部にぽっこりと丘ができている。たんこぶだ。

「英語の辞書でドッジボールのまねごとしてたらしいよ。しかも、室内で。それが君の頭にクリーンヒット！　脳しんとうだってさ」

「あぁ……なるほど」

そういうことか。確かに、クラスの不良連中がよく辞書を投げて遊んでいた。それに巻き込まれたんだな。鈴木は大きなため息をもらす。――と、ちょっと待て。鈴木はぎょっとして飛び起きた。

後頭部の痛みも忘れて振り返り、驚きに目をむく。

「やっ。お隣さん」

「……」

隣のベッドに彼はいた。ベッドの上であぐらをかき、満面の笑みを浮かべてこちらを見ている。

カーテンに囲まれた空間。窓が開いているのだろう、カーテンが風に揺れて波を打っている。

病人を気にしてか、電気が全て消されて、薄暗い。天井とカーテンレールのすきまから太陽光がそそぎこんでいる。その光線が彼の端整な顔立ちに淡い影を落としていた。

男までもがごくりと生唾を飲んでしまう、美しい容姿。着ている学ランに違和感を覚えてしまうほど、日本人離れした、彫りの深い目鼻立ち。女性もうらやむほどの、白い肌。高い鼻。愛嬌のある大きな瞳。そして、特に特徴的なのは、にこりと微笑むそのアヒル口。

鈴木の体を緊張感がからみついた。

この学校で彼を知らない人間はいない。違う学校からも彼を覗きに女子生徒が来るくらいだ。

「藤本……曽良（そら）」

鈴木は無意識にその名を唱えていた。

想い人――藤本砺波――と同じ苗字の少年。見た目も成績も、全てが人並み以上、と噂される、鈴木にとっては雲の上のような存在。

まさか、こうして話すことになるとは思ってもいなかった。

「初めまして、だよね」と、藤本曽良はアヒル口をにぱっと開く。

「名前は？」

「鈴木……です」

戸惑いつつも――同い年に敬語をつかってしまうほどに――答えると、曽良は「うーん」と天井を振り仰いで何かを考え始めた。

「あの……なにか？」

何か考えこむことがあるだろうか。鈴木なんていたって普通の名前じゃないか。鈴木が小首をかしげていると、「よし！」といきな

り曽良は右拳を左手の平に打ちつけた。
「キング、にしよう」
「へ？　キング？」
何のことか分からず、ぽかんとしていると、「そうそう」と曽良は楽しげに頷く。
「君のあだ名だよ」
「あだ名？」
「鈴木だから、すずキング！」
「な、なんですか、それ」
「嫌なら、すずきんた――」
「キングでいいです！」
小学校時代の嫌な思い出がよみがえった。必死になって鈴木は、曽良のよからぬ思いつきを阻止した。
心なしか、息が上がっていた。
この学校で影響力のある彼に、すずきんた〇なんてあだ名で呼ばれるようになったら、卒業間近のこの時期に、中学生活が黒く塗りつぶされてしまう。
それにしても、いきなりあだ名？　よほど人懐っこい人物なんだろうか。
いや、待てよ。そういえば――鈴木はハッとした。うっかり、忘れていた。この藤本曽良に関して、整った容姿のほかにも、ある噂があることを。
鈴木は　まじまじと曽良を眺める。
男の自分でさえ、色気を感じてしまうほどの美しさ。イケメンと説明するのがおこがましくさえ感じてしまう。だが、それ以外に一言で言い表せる言葉は思いつかない。
それほど、彼はイケメンだ。
しかし……
「藤本くんはどうしたの？」
おずおずと鈴木は訊ねた。

「なにが？」
「保健室にいるってことは……どこか体調が悪いんでしょう」
「ああ、そうそう」言って、曽良はだるそうに顔をゆがめて額をおさえた。「なんだか頭がぼうっとして、瞼が重いんだよね。あくびも止まらないし」
「……」
それって、ただの眠気じゃ……。鈴木はそうつっこみたい気持ちをなんとか抑えた。そして、やはり、と心の中でつぶやく。
鈴木はしょっちゅう、耳にしていたのだ。藤本曽良は相当の変わり者で、『がっかりイケメン』だ、という噂を。
「どうかした？」
『がっかりイケメン』こと、藤本曽良はきょとんとして、そう訊ねてきた。

平均的な週番

がっかりイケメン、藤本曽良。はたして何が、がっかり、なのだろうか。

さくさく、と草を踏みつつ、沈みかけの太陽の光を浴びながら、鈴木は考えていた。

「授業中は必ず寝てるよ」と、ある生徒は言う。

「義務教育をいいことに、まず授業に来ない」と、ある生徒は言う。

かと思えば、

「頭はいいらしいよ。定期試験の順位も結構いいって噂」

「運動神経はやばいくらいすげぇらしいぜ。軽々とダンク決めたの見た奴がいる、て。でも体育祭には出てこないんだよなぁ」

「あれだけかっこいいでしょう。だから、スカウトもされるんだって。でも、必ず断るらしいよ。興味ないのかしらね、そういうの」

鈴木は「う〜ん」と唸った。

首を傾げるしかないだろう。がっかりイケメン、藤本曽良。聞きこみをすればするほど、得体の知れないイケメンだ。

いや、そもそも……

「なんで、藤本くんを調べてるの？」

「え？」鈴木はハッと我に返って振り返る。「なに、佐藤さん？」

隣を歩いていたのは、同じクラスの佐藤春香だ。

肩にふれる程度の、さらりとした黒髪。斜めに流した長い前髪を水色のピンで留めている。ぱっちりとした目はやや垂れて優しげだ。物静かな彼女は、それでも、存在感をはなっている。質素な中にも気品があふれて、まさに大和撫子、といったところだ。クラスの男子にも人気がある。

なぜ、そんな彼女と鈴木が一緒にいるのか。

答えは単純、週番だからだ。
放課後、クラスのゴミを校舎裏の焼却炉まで運ぶ。これが週番としての最後の務め。卒業式はもう三日後だから、中学生活最後のゴミ捨て、といえるだろう。
「調べてるんでしょう、藤本曽良くんのこと」
春香は黒のゴミ袋を片手にくすりと笑んだ。
「え……あ、うん」
なんだろうか、その返事は。鈴木は自分で呆れてしまった。未だに女子と話すときはあたふたとしてしまう。
「なにか分かったの？」
「授業は来ないのに頭がよくて、運動神経いいのに体育祭には来ない。イケメンなのに目立とうとしない。うん、何も分からない」
鈴木は眉を曇らせ、ひきつり笑顔。
両手で抱えているゴミ箱を持ち直すと、ガランガラン、と中からビンや缶がぶつかる音がした。春香がくすくす笑う声はそれにかきけされた。
「そういえば、友達が藤本くんと付き合ってたな」
「え！？」
思わぬ情報源だ。鈴木は目をむいて春香を見つめる。すると、春香は「やだな」と苦笑する。
「そんな期待しないで。その子だって、藤本くんの自由すぎる言動にふりまわされて、結局別れちゃったんだから」
「じ、自由すぎる言動……」
いったい、どんな言動だ。
想像もできずに顔をしかめる鈴木の隣で、春香は「あ」と何かを思い出したような声をあげる。
「そうだ！　藤本さんに聞いたらどうかな」
「藤本さんっ？」
「そうそう」と、春香は満面の笑みを浮かべて鈴木に振り返る。「藤本砺波ちゃんよ。知ってるでしょ？　ウチのアイドルだもんね」

どきり、と鈴木の心臓が跳ねる。
脳裏をよぎったのは、「お金貸して」と天使のような笑顔で声をかけてきた少女だ。
思わず、鈴木の顔は赤らんだ。あわてて、それを隠すようにそっぽをむく。校舎を囲むように植えられた桜の木が目に飛びこんできた。
ピンク色に染まった花びらが風に舞って飛んでいく。
鈴木はその様をうっとりと見つめながら、砺波の姿を想像した。
風と戯れる花びらの中、ゆっくりとこちらに振り返る彼女を思い描く。桜の花がよく似合う。
「鈴木くん、どうしたの？」
「！」
鈴木の意識が一気に現実に引き戻される。「いやいや、なんでもない」と慌てて返し、「な、なんで、藤本さん？」と平静を装って訊ねた。
春香は妙な間をおいたものの、「だって」とこれまで通りの明るい声で答えた。「あの二人、ダブル藤本ね、幼馴染なんだってよ？」
「幼馴染！？」
ぎょっとして鈴木は振り返った。
幼馴染……なんて甘美な響きだ。――いやいや、そんな場合じゃない。鈴木は下手な咳払いをして、気を取り直す。
「じゃ、まさか付き合ってるの？」
「ううん。ただの幼馴染だ、て。あんなバカに恋愛感情は抱けない、て藤本さんが言ってたらしいよ」
「あんなバカ？」
あの藤本砺波がそんなことを言ったのか。可憐で愛らしい、あの少女が。あまりにもイメージと違って、鈴木は面食らった。
「なぁに、鈴木くん。変な顔」
こらえきれなかったのか、春香は遠慮がちに笑いだした。
鈴木は「いや、別に」と口ごもり、顔を前に向きなおす。ごまか

すように、「あと少しだね」と声をかける。下手な芝居だが、嘘ではなかった。焼却炉は、すぐそこに迫っていた。目の前の角を曲がれば、校舎裏だ。

しかし――

「なに、すました顔してんだよ、ええ！？」

平均的な校舎裏

いきなり、どすのきいた声が聞こえてきて、鈴木はぎくりとした。
「なに？」と、隣で春香が不安げな声を漏らす。
二人は一度顔を見合わせ、そうっと忍び足で声がしたほう――校舎裏へと歩みより、校舎の角から覗きこんだ。そこでは……
「か、かつあげ？」
押し殺した声で春香が驚きの声をあげる。
確かに、焼却炉の横、桜の木の下で、がたいのいい男三人が誰かを取り囲んでいるようだ。
「あれ、ラグビー部の不良トリオだわ」
春香が心配そうにつぶやいた。
この学校のラグビー部は、名ばかりの部だ。ラグビーの練習なんかしちゃいない。不良が溜まり場をさがして部をつくっただけだ。
特に、あの三人組はその主格連中。鈴木はぞっとした。いったい、誰が目をつけられてしまったのだろうか。
「ほら、はやく渡せよ」
一人の男が低い声をあたりに響かせた。
やっぱり、かつあげだ。
鈴木はごくりと生唾を飲みこんで、自分にしがみつくようにして状況を見守っている春香に振り返る。
「佐藤さんは先生、呼んできて」
「え？」と春香は目を丸くした。「鈴木くんは？」
「俺は残るよ。心配だから」
春香は「でも」としぶったが、それを鈴木はなんとか説得した。
心配そうに何度も振り返る春香を見送って、鈴木は再びかつあげの現場に目を戻す。
「ほら、出せって言ってんだろ」
今度は、違う男が桜の木に追いやられている誰かに迫っている。

ああ、どうしよう。春香についかっこつけてしまったが……残ったところで自分にできることはない。出て行っても、殴られて終わりだろう。だが、このまま見ているだけ、というのも。

鈴木は校舎の陰であたふたとしていた。

こうなったら、出て行ってお金を渡そうか。そう思い始めたときだった。

「渡せって言ってんだろ、第三ボタン！」

「第三ボタン！？」

思わず、鈴木はつっこんでいた。

大声で。

やばい、と気づいたときには、時すでに遅し。桜の木を取り囲んでいた三人組はこちらをじろりと睨みつけていた。

鈴木の背に気持ち悪い汗がつたっていった。

「なんだ、てめぇは？」

ラグビーなんてしてないくせに、体格だけはラガーマンのようなたくましい男が、リーゼントを揺らして怒鳴りつけてきた。同級生とは思えない、老けた……いや、貫禄のある顔だ。

鈴木は「あ、いや……」とあとじさりつつ、「田中です」ととっさに偽名を口にしていた。

ところが、そのとき――

「陛下じゃないか～！」

聞こえてきたのは、この場にそぐわない、なんとも暢気な声。

「え！？」

陛下？　いや、それよりも、この声は……

「こっち、こっち！」

やはり、聞き覚えのある声だ。鈴木は、まさか、と思って頬をひきつらせた。

壁をつくっているラガーマンたち（一応）の体のすきまから、ひょいっとのびる一つの手。それが右に、左に、と動いている。やがて、「ちょっと、どいて。ごめんね」という声がして、ラガーマン

の体を押しのけて、一人の少年が現れた。
「やあ、また会ったね。陛下」
にぱっと大きく開かれたアヒル口。短い黒髪。彫りの深い顔立ち。
夕焼けで暖色に染まる白い肌。
鈴木はぽかんとしてしまった。
かつあげされていたのは（第三ボタンを）、藤本曽良だった。

平均的な一本背負い

「なんで、かつあげされてるんですかっ。しかも第三ボタン！？」
かすれた声で鈴木は訊ねる。すると、曽良はのこのこ歩いてきて、肩をすくめた。
「知らないよぉ。校舎裏に蜂の巣があるから来い、て呼びだされたんだよ」
「どんな呼び出され方されてるんです」
「一緒にハチミツをとらないか、て誘われたんだよ。来るでしょう」
「来ないでしょう」
「そしたら、いきなり第三ボタンをよこせ、て言われてさ。陛下が来てくれて助かったよ」
鈴木の前でぴたりと立ち止まり、曽良は満面の笑みを浮かべた。
鈴木は疲れ果てた表情で頬をひきつらせる。
だから、陛下、てなんだよ？　キングじゃなかったのか。その疑問を口にする気力もわいてこなかった。どうせ、まともな返答はこないだろう、と悟ってしまった。
「でも、なんで第三ボタン……」
ぼそりとつぶやこうとした鈴木を、大きな影が覆った。ぎくりとして顔を上げれば、そこには巨大な壁――いや、リーゼントのラガーマンが立っていた。鷹のような鋭い目が光っている。
「ふ、藤本くん！」
慌てて叫んで背後を指差すと、曽良は「ん？」と落ち着いた様子で振り返った。その茶色い瞳が、ふりかざされた大きな拳を捉えるのが先か、それが振り下ろされるのが先か――
「こうなったら、力ずくで第三ボタンを奪ってやる！」
くわっとリーゼント・ラガーマンが切れ長の目を見開いて、上半身を回転させた。びゅおっと竜巻のような風を起こして、血管が浮き出た拳が曽良の顔めがけて振り下ろされた。

「うわああっ！」

なぜか、鈴木が悲鳴をあげていた。思わず、目を瞑り、顔をそむける。次の瞬間、どすん、と重低音が足元から振動となって伝わってきた。

そのときになって、やっと自分が目をつぶっていたことを自覚して、鈴木はあわてて瞼を開いた。

「ふ、藤本くん！」

がっかりイケメンが、本当にがっかりなことに――パンダのように目のまわりを青くした曽良の顔を想像して、鈴木はとっさに声をあげていた。だが……

「だいじょう……ぶ」

心配する鈴木の声はしぼんでいった。

目をぱちくりとさせ、「え？」と目の前の光景に困惑する。

鈴木と同じような表情を浮かべているのは、桜の木の前で突っ立っているラガーマン二人。彼らもまた、眼前で起きた出来事を分析するのにてまどっているようだ。

「まったく、もう」と、のんきな声がした。「いきなりだったから、手加減できなかったじゃないか」

ぱんぱん、と手をはらう少年。すらっとした体つきの、美少年。その足もとで、マッスルボディのラガーマンが仰向けに倒れている。彼も何が起きたのか分からなかったようだ。口はあんぐり開いたまま、目が点になっている。

「い、一本背負い？」

誰かがぽつりとつぶやいたのが聞こえた。

鈴木はぎょっとして、あらためて曽良をまじまじと見つめた。

――運動神経はやばいくらいすげぇらしいぜ。軽々とダンク決めたの見た奴がいる、て。でも体育祭には出てこないんだよなぁ。

誰かの証言が脳裏をよぎる。

まさか、彼は武道もたしなんでいるというのか。いや、たしなむ程度で、自分の二倍はあるかという大男をとっさに一本背負いでふっとばせるだろうか。

鈴木は呆然として、「なんて……」と消え入りそうな声を漏らした。「なんてイケメンなんだ」

どこが『がっかりイケメン』なのだ、と鈴木はあきれかえっていた。感心するのを通り越して、圧倒されていた。

平均的な第二ボタン

「くそぅ」

悔しそうな震えた声がした。倒れているリーゼント・ラガーマンだ。いかつい顔がさらに険しくゆがむ。その目にはじんわりと涙が。まるで、鬼の目にも涙。足元に蛇でもいたかのように、鈴木は「うわわ」と飛びのいた。

「よっちゃーん！」と、モヒカン頭のやせこけた男が吼える。

「無念だーっ」と、肩までのロングヘアーを茶色に染めた、整った顔立ちの男が続いた。

ラガーマン二人組はその場に崩れ落ち、地面に拳を打ちつけ始めた。

どうやら、さっきの一本背負いで負けを確信したらしい。反撃する気はないようだ。

「いったい、なんなのサ」曽良は困り果てた表情でため息をもらす。

「なんで第三ボタンなんて狙うの？　今のトレンドなの？」

「どんなトレンドですか」

鈴木はぼそりとつっこみをいれ、「もしかしてですけど」と言いづらそうに切りだした。

「第二ボタンの間違いじゃないのかな」

「第二ボタン？」

曽良はくるりと振り返り、「うーん？」と赤く染まる空を振り仰ぐ。ぴんと来ないようだ。

「ほら、卒業式に、争奪戦になるでしょう。女の子が好きな男の子の第二ボタンをねだる、てやつですよ。恋愛成就のお守りだかなんだか、しりませんけど」

自分にとっては、都市伝説のようなものだが――鈴木は心の中でそうつけたした。

しかし、たとえ第二ボタンだとしても、彼らがそれを狙う理由は

分からない。いや！　知りたくない。鈴木は顔色を悪くした。これ以上、巻きこまれるのはごめんだ。

「お前のクラスの坂本恵理！　よっちゃんはずっと彼女にぞっこんなんだ！」

「でも、恵理ちゃんはお前に憧れてて……だからよっちゃんは、お前の第二ボタンを卒業式にプレゼントして、彼女を喜ばせようと思ったんだ！」

ああ、知ってしまった。不良の恋愛事情を知ってしまった。鈴木はがっくりと頭を垂らす。

「えりちん？」

曽良は「あ～」と納得したような声をあげた。それから不思議そうに眉をひそめて、倒れているリーゼント・ラガーマンを見下ろすと、

「君のをあげればいいじゃない」

鈴木は「ひいっ！」と思わず声をあげていた。これだから、イケメンは！　と心の中で叫んだ。空気を読んでくれ、と祈るように訴える。もちろん、心の中で。

うなだれていた二人のラガーマンも仰天した様子だ。

おそらく、分かっていないのは曽良だけだろう。今の一言は、止めの一撃だ、ということを。

「うるせぇ、俺のをあげて喜んでくれるなら苦労はしねぇんだよ！」

リーゼント・ラガーマンは飛び起きて、涙声で叫んだ。心の叫びだ。鈴木の胸にも矢のごとくつきささった。

分かる、分かる、その気持ち。鈴木は、うんうん、と頷く。

「あげてみないと分からないじゃないか」

しかし、曽良は納得いかない表情で言い返す。いい加減にしてくれ、と鈴木は頭をかかえた。

「分かるんだよ！　くそう！」やけくそのように言い捨てて、リーゼント・ラガーマンは曽良の学ランの胸倉をつかんだ。「お前みたいなモテ野郎には一生分からねぇよ！」

再び、リーゼント・ラガーマンの右拳が紅い空めがけて振り上げられた。

そのときだった。

「なにしてるんだ、お前たち！」

校舎裏に、怒鳴り声がこだました。

平均的な生徒指導室

校舎裏に現れたのは、年中半そで半ズボンの暑苦しい男、体育教師の大崎だった。佐藤春香が呼んできてくれたのだ。

その場にいた、ラガーマン三人衆と、第二ボタンが狙われた藤本曽良、そして見事に巻きこまれた鈴木は、生徒指導室へと連行された。

高校受験用の資料がぎっしりつまった本棚が囲む、狭い生徒指導室。カーテンの隙間から西日が差しこんで、室内はオレンジ色に染まっている。

五人の中学生（まもなく高校生）が、ずらりと横一列にパイプイスに座っていると、あらためてこの教室の狭さを思い知らされる。

尋問が始まって、まもなく三十分ほど経っただろうか。しかし、事情が事情なだけに、ラガーマン三人組は口を噤んで知らぬふり。まさか好きな子のために、曽良の第二ボタンを狙っただなんて口が裂けても言えないのだろう。

肝心の曽良はずっとあさっての方角を見ているし、大崎の説教を聞いてもいないようだ。夢中で何かを目で追っている。キラキラとした眼差しで、いったい、なにを見ているんだか。もはや、鈴木はその視線を追う気にもならなかった。

まあ、そういう状況だと、自然と教師の標的は気弱そうな生徒――つまり、鈴木になるわけで。

「おい、鈴木」ゴリラ、と裏で呼ばれている大崎。鼻からだいぶ離れたところにある厚い唇を、気に食わない様子でとがらせた。「お前は何か知ってるんだろう。言え。なにがあったんだ？　佐藤はかつあげだと言っていたが？」

ぎくりと鈴木は体をびくつかせた。曽良をはさんで右に並んでいる不良三人組の視線を感じる。

「いや……」

こういうときばかり、一般人に負担がかかる。鈴木は目を泳がせて、なんとか言葉をにごそうとする。

「そのぅ……」

必死にごまかし方を探していたが、ふと気づく。――いや、待てよ。なぜ、板ばさみにあわなきゃならない。そもそも、何と何にはさまれているのだ。そうだ、卒業式を目の前に、なにを怯えている。正直に言えばいいだけだろう。どうせ、この不良三人組ともあと三日でお別れなのだから。

膝に置いた両手の拳を握りしめ、鈴木は決意を胸に顔を引き締めた。

「実は、第二ボタンを――」

大崎の海苔のような眉がぴくりと動く。

ぴりっとその場に緊張感が走った。背筋がぞっとする。

鈴木は手の平がじっとりと湿っていることに気づく。なんだろうか、この重圧は。急に部屋の中が暗くなったような気がする。

ああ、おそろしい。今、右を見るのがおそろしい。

「第二……ボタン……」

なぜだろうか。喉がしまっていく。

鈴木の視線は自然と落ちていった。

「第二ボタン……」

だめだ。言うんだ、俺。鈴木は自らを奮起させ、勇気をしぼりだす。

ここで言えなきゃ、男じゃない。ここで言えなきゃ、学校のアイドルに告白なんてできっこない。鈴木は自分にそう言い聞かせ、ぐっと爪がくいこむほどに拳を強く握りしめた。

そしてついに！　鈴木はばっと顔を上げ、大崎を睨みつけるように見つめ、

「第二ボタン――くださいっ！」

静まり返った教室に、運動場から野球部のかけ声が聞こえてくる。ファイ、オー。ファイ、オー。残念ながら、その声援は鈴木には届

かなかったようだ。
鈴木は泣きそうな表情を浮かべて、唇を噛みしめていた。
嗚呼、無常。根性はどこからわいてきますか。――鈴木は心の中で祈るように誰かに訊ねていた。
大崎の鬼瓦のような顔が微妙にゆがんだ。ポロシャツの第二ボタンを隠すように襟元をつかむ。ほんのりとその頬が赤らんだのは、夕焼けのせいだと信じたいと思った。

平均的な廊下

「見事に巻きこまれたなぁ」

緊張感のせいか、へとへとになった鈴木はため息混じりにそうぼやいた。

とりあえず、鈴木は解放された。いつも問題を起こすのは、あのラガーマン三人衆だ。大崎も、どうせいつものことだ、といった感じなのだろう。

気になるのは、曽良だ。

彼も大崎に、帰っていい、と許可をもらったはずなのだが、生徒指導室から出てきたのは鈴木だけだった。振り返ると、大崎になにやら話しかけていた。

これ以上、関わったらどうなることやら。卒業を前に問題を起こすわけにもいかない。そもそも、曽良とは今朝会ったばかりで友達というわけでもない。待つ義理はなかった。鈴木は曽良をおいてさっさとその場をあとにしたのだった。

しかし、なぜだろう。やはり、気になってしまうのだ。

静まり返った校舎の廊下。ひたひたと響いていた足音がぴたりと止む。

「『がっかりイケメン』……か」

ぼんやりと突っ立って、鈴木はつぶやいた。

結局、『がっかりイケメン』とはなんなんだろうか。

たしかに、変わっている。それはようく分かった。

だが、悪い人だとは思えない。事実、聞きこみをしているときも、悪い噂は聞かなかった。過去に交際経験のある女子からはどうやら評判が悪いらしいが、その理由もはっきりしない。

見た目はもちろん、頭もいい（という話だ）し、運動神経もいい、性格もよさそうだ。なにより、そういった長所をひけらかすようなこともしていない。イケメン特有のいやらしさのようなものが、一

切感じられないのだ。
いったい、なにに『がっかり』するというのだ。
誰もいない廊下で一人、鈴木は小首をかしげていた。――そのときだった。
「陛下！」
いきなり、ぽん、と肩を叩かれ、鈴木は文字通り飛び上がった。
「うわあ！？」と叫んで振り返る。
「なんだよぉ。人を幽霊みたいに」
「ふ、藤本、くん！？」
背後に立っていたのは、生徒指導室に残ったはずの藤本曽良、その人だった。
鈴木はバクバクと騒ぐ胸を押さえ、いぶかしげな表情で曽良を見つめた。
「いつのまに、後ろに……」息まできれてしまっている。体の中が熱い。「あ、足音とかさ、たててくれないと困るんですけど」
どういう文句だ。鈴木は自らつっこんだ。
しかし、曽良は特に気にする様子もなく、けろっとした様子で肩をすくめる。
「ごめん、ごめん。癖なんだ」
「どんな癖ですか。忍者ですか」
「うそ、俺が！？」
「いや、知りませんよ」
「じゃあ、君は殿だね、殿！」
「ああ、和風ですね――って、俺、関係ないでしょう。いや、だから、原形、全然無いじゃないですか」
「そうだ、そうだ」と曽良は鈴木の主張を完全無視。さっさと話を変える。「これ、渡そうと思って」
鈴木の機嫌を気にするつもりは皆無なのだろう。曽良は鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気で、ポケットからある物を取り出し、ずいっと鈴木に差し出した。

「ほら、殿。あげる」
「だから、なんで殿……」
言いつつ、差し出されたものに視線を向け、鈴木はぎょっとした。
さあっと血の気がひいて、体が震えだす。
「こ、これは……」
「欲しがってたから、もらってきたんだ」
この世の全ての悪を否定するかのような、純真な笑みだった。窓から差しこむ眩い光と相まって、それは神々しくさえ見える。
鈴木は怒鳴りつけることも、それを払いのけることもできなかった。情けない笑顔を浮かべ、ごくりと生唾を飲みこむ。
鈴木の眼球に映りこむ、真ん丸の薄い石のようなもの。本来ならば、布と布とを留め合わせる役目を担った服飾物。しかし、ある一定の条件がそろうと、愛し合う二人を赤い糸でつなげるアイテムになるという。
そのアイテムが、目の前にある。
鈴木の頭は真っ白になっていた。なんてことだ。まさか、生徒指導室に残って大崎に何かを言っていたのは……
頬を赤らめたゴリラ――もとい、体育教師の顔が浮かんだ。
「あの、ふ……藤本くぅん！」動揺する鈴木の口から、本来、十五歳男子が出せる音域を越えた声がでた。「その……あれは、言葉のあや、というか……どうにか、うまいこと言って、それを先生に返して――」
「クラスの女友達にあげるんでしょう」
さらりと曽良はつぶやいた。くすくすと笑いながら。
鈴木は一瞬、なにを言われたのか分からなかった。ぽかんとしていると、
「君のクラスに大崎先生に憧れてる女の子がいて、君は彼女のためにもらおうとしただけ――ってことにしといたから」
涼しげな表情でそう言って、曽良は、ほい、とボタンを鈴木に向かって軽く放った。

「え、わ、うわ……」
あたふたとしながら、鈴木は放物線を描いて落ちてくるボタンを受け止める。それが誰の第二ボタンかを考えれば、バレーの要領で、スマッシュを決めてもよかったのだが……
卵でも抱くように大事そうに両手の平にそれを乗せ、唖然とした表情で曽良を見つめる。
「どういう……」
「ラガーマンズのアイディアを拝借しただけだよ。どういたしまして」
あっけらかんと曽良は笑った。

平均的なイケメン

なんてことだ。『がっかりイケメン』はいい奴じゃないか。

鈴木は感動に言葉を失っていた。性格まで良いなんてずるいじゃないか――そんなひがみさえ生まれない。

イケメンすぎる。圧倒的にイケメンすぎる。

そうか。俺が生徒指導室を出てから、わざわざ、誤解を解くために大崎に嘘をついてくれたのか。大崎に「第二ボタンをください」と口走ってしまった自分をカバーするために、あれは大崎に憧れる女友達（いないだろ）のためだ、とかなんとか言って。

助かった。もう少しで、思わぬ形で平均超えを果たすところだった。

ああ、いい人だ。いい人だ。藤本曽良は最高のイケメンだ。

曽良とならんで廊下を歩きながら、鈴木はまるで夢心地だった。一緒に歩けることを誇りにさえ思えた。

ちらりと横目で曽良を見る。もはや、後光が見える。

自分は今、『がっかりイケメン』を尊敬している。カリスマだ。

彼は『カリスマイケメン』だ。

「えりちんかぁ」

三年の教室への階段をのぼっていたときだった。ふいに、曽良がつぶやいた。

「坂本恵理さん、ですか」

浮き足立ちながら、鈴木が相槌を打つ。

坂本恵理。よっちゃん、こと、リーゼント・ラガーマンの想い人。

どうやら、曽良と同じクラスの女子らしい。ラガーマンたちによれば、曽良に憧れているようなのだが……。

「藤本くんは、その気あるんですか？」

階段をのぼりつつ、鈴木は遠慮がちに訊ねる。

「その気って？」

「だから、好き、とか、付き合いたい、とか……」
鈴木は口ごもり、三年間履き続けている上履きに視線を落とす。自分で言ってて虚しくなった。自分とは無縁の話だよなぁ、としみじみ思う。
鈴木、十五歳。女性との交際経験はない。それで、学校のアイドルとどうにかなろう、と夢見るなんてやはり身の程知らずなのだろうか。
「ないよ」
きっぱりと答えた曽良の声に、鈴木はハッとして顔をあげる。そして、思わぬものを目にする。悩ましげな曽良の横顔だ。
「藤本くん？　どうかしたの？」
「いいや」ぽつりと言って、曽良は最後の一段をのぼった。ようやく三年の教室が並ぶ三階だ。「えりちん、俺に憧れてるのかぁ」
廊下を前に立ち止まり、ぼんやりと曽良はひとりごちた。
不穏な空気を感じて、鈴木は顔をしかめる。
「それが、どうしたんです？」
いつものことじゃないのか、と鈴木は思った。曽良はそんなこと慣れっこのはずだ。しかし、なんだろうか、この曽良の雰囲気は？
まさか、まんざらでもないのか。いや、しかし、たった今、付き合う気はない、と答えたばかりだ。
戸惑いつつも最後の一段をのぼって、曽良の横に並ぶ。
「誘ったら、オッケーしてくれるかな」
「は！？」
三年の廊下に、鈴木の驚愕の一声が響きわたった。
「誘うって、どういうこと……」
「えりちん、結構かわいいんだよ」
曽良は腕を組み、にんまりと笑む。
「ちょ……」あまりに困惑して、ちょんまげ、と言いそうになった。
鈴木はぶんぶんと頭を振って、気を取り直す。「ちょっと、待ってくださいよ！　興味ないんでしょう、坂本さんに。かわいいから、

なんなんですか!?」
「ええ?」と曽良はジト目で鈴木を見つめ、むっと口をとがらせる。
「そりゃ、かわいかったら遊びたいじゃない。付き合う気はなくても」
「付き合う気はないのに、デートするってことですか!?　相手の気持ちを分かってて!?」
「相手の気持ち?」
わざとらしく曽良は小首を傾げる。
鈴木は頭に血が上るのを感じた。
「坂本さんは藤本くんのこと好きなんですよ!?　それでデートしたら、相手に期待させて……」
鈴木は突然言葉を切った。なに語ってるんだ。俺、そこまで経験ないだろ。
「とにかく、だめですよ!」
「遊ぶだけだよ〜。なに、ムキになってるのサ」
「遊ぶだけ、て……じゃ、なにする気なんです?」
確かに、過剰反応しすぎかもしれない。鈴木はなんとか自分を落ち着かせる。
同じクラスの女子なんだ。ボーリングとかカラオケとか、友達として行ったって不思議じゃない。自分には経験はないが……。
つい、イケメンだから、と遊び人と決めつけてしまう。だめだよな。曽良はいいイケメンなんだ。カリスマイケメンだ。まさか、遊び人なんてことは……
「あんなことや、こんなこと、さ」
はっはっは、と悪代官のように怪しく笑って、曽良は歩き出した。
鈴木はぎょっと目をむいた。
「あ、あんなことや、こんなこと……」
鈴木の顔が真っ赤に染まった。あんぐりと開いた口がふさがらない。
ぴしっと何かがひび割れる音がした——気がした。

「さっそく、電話しよう」なんて言って、曽良はポケットから携帯電話を取り出した。「七時に、駅前の公園で待ち合わせかなぁ」

遠ざかっていく曽良の背中。そこに、もはや後光はなかった。鈴木は愕然として、その背中を見送った。

なんてことだ。自分は間違っていたのか。

「結局……ただのイケメンなのか？」

『がっかりイケメン』――その意味がようやく見えた気がした。

平均的なラガーマン

鈴木は悩んだ。『がっかりイケメン』はこれから、坂本恵理という女子生徒にあんなことやこんなことをしようとしている。付き合う気もないのに、自分に好意をよせる女性の気持ちを弄ぼうとしているのだ。

それを鈴木は知ってしまった。どうするべきだろうか。

日が落ちかけて薄暗くなった教室に、一人残って鈴木は悩んでいた。

ついさっき、廊下を歩いていく『がっかりイケメン』の姿を目にした。スキップなんかして上機嫌だった。

きっと、これから待ち合わせの場所に行くに違いない。うまく誘えたのだろう。そりゃそうだ。彼はイケメンだ。それも相手は自分に好意をよせている女性。誘えないわけがない。

ああ、どうしよう。窓際の自分の席で、鈴木は神妙な面持ちで机を睨みつけていた。

このまま、放っておくのか。

「……」

いや！

鈴木は立ち上がった。イケメンの好きにさせるか。俺も男だ。中学生活最後に、伝説を残そうじゃあないか。悪しきイケメンから、麗しき女生徒を救う、という伝説を。

「大変です！」

そんなわけで、覚悟を決めた鈴木は……

「さ、坂本……坂本さんが、イケメンの餌食に！」

「あぁ？」

扉を開けるとそこは、雪国――ならぬ、不良のたまり場。

「んだよ、てめぇ？」

パンチパーマの男が、虎のような目つきで威嚇するように睨みつけてきた。

鈴木は今にも逃げだしそうな足を、なんとかそこに食いとどめる。

「あ、あの……その、『よっちゃん』、います？　き、緊急事態、で」

部屋がざわついた。

そこは、部室棟にある一室。二階の角にあるラグビー部の部室だった。換気の悪い、ほこりっぽい部屋。かなり不衛生だ。ぼこぼこにへこんだロッカーが、ベンチに座ってたむろう四人の不良たちを囲んでいる。

煙たくなかったのがせめてもの救いだ、と鈴木は思った。

「てめぇ、誰だよ？」

パンチパーマの男がおもむろに立ち上がり、がんつけながらこちらに歩みよってくる。

「あ、あの、鈴木と、申します！」

これでも三年生だ。学校にはもう同い年か年下の生徒しかいない。目の前のパンチパーマが年上だという可能性は――数ヶ月の差を除けば――ほぼ無い。それなのに、まるで上官に接する新兵のような態度をとってしまう。

しかたない。パンチパーマはこわい。

「ど、どうしても、『よっちゃん』さんにお会いしたく……」

「はあ！？　よっちゃん先輩になんの用だ？」

「だから、その、坂本さんがイケメンにあんなことやこんなことをされてしまいそうなので――」

こらえるように目を瞑り、必死に口を動かして報告していた、そのときだった。

「あんなことや、こんなことだと！？」

いきなり、背後で野太い声がした。

「ちぃーっす」と、パンチパーマや他の不良たちの低い声がそれに続いた。

鈴木がハッとして振り返ると、
「どういうことだ？　恵理ちゃんがあんなことやこんなことをされるってのは！？」
そこに立っていたのは、リーゼント・ラガーマンだった。
ごつごつとした四角い輪郭。相変わらず、鋭い目つき。もともと、老けた……いや、貫禄ある顔つきが、さらに険しくなって、まるで金剛力士の阿形像のようだ。その迫力が、彼の巨体をさらに大きく見せている。
普段だったら、こんな不良と対峙したら震えあがっていただろうが、今は違う。初めて、鈴木は不良を前にしてほっと安堵していた。
「お前……」とリーゼント・ラガーマンは細い眉をぴくりと動かし、目を眇める。「さっきの奴じゃねぇか！？」
くるりと身を翻して部室に背を向け、鈴木はこわばった表情でリーゼント・ラガーマンを見上げる。
「坂本さんが好意をもっている、と知って、藤本曽良があんなことやこんなことをしようとしているんです！」
「なんだと！？」
くわっとリーゼント・ラガーマンの細い目が見開いた。
「七時に駅前の公園で待ち合わせする、とか言ってスキップでかけていきました！」
「スキップだと！？　ふざけやがって」
リーゼント・ラガーマンは拳を握りしめた。今にも憤怒の炎が燃え上がりそうだ。
「藤本曽良……ただじゃおかねぇ」
「とにかく、止めたほうがいいと思います。坂本さんが危ない！」
鈴木があわてた様子でそう促すと、「おう！」とリーゼント・ラガーマンは気合じゅうぶんの表情で鈴木に視線を向けた。
「恩にきるぜ、田中！」
こめかみに血管を浮き上がらせて、リーゼント・ラガーマンは踵を返して走り出す。

「鈴木です！」
鈴木もそのあとを追うように、慌てて駆けだした。

すっかりあたりは夜の様相を帯び、さらさらと桜の木が寝息をたてていた。
時刻は、まもなく六時四十五分……。

平均的な不良の恋

すっかり、宵が訪れた駅前の公園。真ん中に遊具。その周りにベンチ。さらに、それを囲うように敷地を区切るフェンスがしかれている。

フェンスとベンチの間には、草木が生い茂り、そこは公園の中からは死角になっている。そう、たとえそこにラグビー部員が潜んでいても、誰も気づかないほどに。

「恵理ちゃんと俺は、幼稚園のころからずっと一緒だったんだ。家も近所で親同士も仲良かったからな。でも……小学校四年のとき、恵理ちゃんの親が転勤になって、北海道に引っ越しちまった。メールでやりとりはしてたんだけどよ、俺、言ってなかったんだよ」

「なにを、ですか？」

「その……だから……普通のフリしてた、てことだよ」

つまり、グレたことを言っていなかった、ということか。鈴木は心の中でそうつぶやいた。

「だけどよ」

その巨体を小さく縮めて、よっちゃんは厚い唇をとがらせた。いじけたガキ大将にしか見えない。

「去年、急に恵理ちゃんが戻ってくることになってよ。嬉しかったけどよ、合わせる顔がねぇじゃねぇか。嘘ばっかついちまってたからさ。頭もよくて、運動神経もよくて、皆に好かれてて、髪もさらさらヘアーだとか」

それはさぞ、びっくりしただろう。鈴木はちらりとよっちゃんのリーゼントに一瞥をくれる。

「ずっと避けちまって」と、よっちゃんはばつが悪そうに視線を落として頭をかいた。「遠くから見つめて、目があったら逃げる。その繰り返しだよ。話しかけられても、おう、しか言えなくて」

鈴木は草むらに正座した格好で、目をぱちくりさせる。

なんと、自分は今、不良の恋愛相談に乗っているのか？　しかも……なんだ、このかわいらしい相談は？

「そしたらよ、ある日、見ちまったんだよ」

急によっちゃんは顔を上げ、充血した瞳で鈴木を食いいるように見つめてきた。

「恵理ちゃんがよぉ、あの『がっかりイケメン』によぉ、ミサンガつくってあげてるところをよぉ」

「み、ミサンガ！？」

それは、なんて古風な。鈴木はぎょっとした。

なぜだろう。リーゼントの不良ラガーマンにミサンガ。どうも、時代錯誤な感じがするのだが。

「放課後の教室でよ、恵理ちゃんが……恵理ちゃんが、あの『がっかりイケメン』の手首にミサンガをよぉ、つけてたんだよ。好きな人にミサンガつくるのが、夢だったの～なんて言って、もう俺はこんとらっぱあす」

コントラバス？　後半はもうなんと言っているのか、分からなかった。嗚咽と鼻をすする音でめちゃくちゃだ。

「それで、坂本さんが藤本くんに憧れてる、て分かったんですか」

よっちゃんがいつ取り乱すともしれない。鈴木はいつでも立ち上がれるように構えつつ、おずおずと訊ねた。

「当然だよ。俺みたいなラグビーしかないような男より、ああいうイケメンのほうがいいだろう」

鼻で笑いつつ、吐き捨てるようによっちゃんは言った。

いや、あなた、ラグビーやってないでしょう。――鈴木は喉まで来たその言葉を、唾と一緒に押しこんだ。

「だから、せめて、あのイケメンとうまくいってくれればいい、と思ってよぉ」

「それで、第二ボタンだったわけですね」

「昔、恵理ちゃんがメールで言ってたんだ。『好きな人に第二ボタンをもらうのが夢なの～』て」

「夢が多い人なんですね」
「ほら、ここ、見てくれよ」
言って、急によっちゃんは腰に手を回した。ごそごそと何かを取り出して、それを地面に広げる。ばさばさ、と散らばったのは大量の紙。何か文章がプリントされているようだ。
「なんですか、これ」
鈴木は地面に手を置いて、手近な紙に視線を落とす。
何箇所か、蛍光ペンでマークされているようだ。何かの資料だろうか。
「この文章なんだけどよ」言って、よっちゃんはばら撒かれた紙の中から一枚選び出し、マークされた箇所を指差した。「ほら、書いてあるだろ」
書いてある、てなにが？
暗がりの中、鈴木は目を凝らしてよっちゃんが指差す文章を見つめた。身を屈め、しがみつくようにして、読解を始める。
――そうそう、第二ボタン。わたしは、好きな人に第二ボタンをもらうのが夢なの～。
って、待て！　鈴木は「ひえっ」と声を上げてのけぞった。「こ、これは……」
「恵理ちゃんからのメールだよ」
なんて穏やかな表情をするんだ。まるで子ウサギでもながめるような、優しい眼差し。よっちゃんはうっとりと、プリントアウトした恵理からのメールを眺めている。
「肌身離さず持ってるんだ」
「きもちわる――」
思わず言いかけた瞬間、こちらを狙うぎらりと光る眼光に気づいた。
「きもちわ、かる！」とっさに、鈴木はひきつり笑顔を浮かべて言

い変える。「気持ち分かります！」
「そうか。いや、まあ、な。惚れた女だから、つい」
よっちゃんは「へへ」と照れ笑い。ごまかすように鼻をかいた。
鈴木も「はは」とつくり笑い。
もしかして、俺はまた変なのと関わってしまったんじゃないだろうか。——今さらながらに、嫌な予感がした。

平均的な逢引

「あ、来たんじゃないですか」
「なに!?」
伸び放題の草とベンチをバリケードにして、二人はこっそり公園内の様子をのぞく。
人気のない公園に、一つの人影が迷いこんできた。おろおろとしながら公園の中へ中へとはいってくる。
やがて、公園の真ん中にたたずむ街灯の光が、その姿を明らかにした。
紺のセーラー服に身を包んだ少女。長いストレートの黒髪。前髪は眉のところで一直線にそろえられている。スカートは膝丈で、両手を前で重ねるさまは、なんとも慎ましやかだ。戦国時代の姫君を髣髴とさせる。
色白の小顔。聡明そうな切れ長のつり目。ふっくらとした唇。鼻筋が通った化粧映えしそうな綺麗な顔立ち。髪型や衣服を変えれば、一躍学校のアイドルに君臨しそうだ。――藤本砺波には悪いが。
なるほど、曽良が「かわいい」と言っていたのも頷ける。
鈴木はちらりと横目でよっちゃんの様子をうかがった。
「え、恵理ちゃん……」
震えるリーゼント。紅潮した頬に、潤んだ瞳。
見なかったことにしよう、と決めて鈴木はすぐに視線を前に戻す。
そして、「あ!」と思わず声をあげる。
「藤本くんです。来ましたよ」
声を押し殺しつつ、鈴木は興奮した様子で早口で言った。
「ど、どこだ?」と、よっちゃんはきょろきょろとリーゼントを動かす。がさがさと草が迷惑そうに音を立てた。「あ、あれだな!のこのこ来やがって」
そりゃ、来るでしょう。――鈴木は言いたくてたまらなかった。

やはりスキップで現れた曽良は「えりちん」と声をあげた。「ごめーん、待った?」なんてのんきに手を振っている。

恵理はハッとして振り返り、上品な笑顔を浮かべて曽良を迎えた。

二メートルほど先で、街灯の下、対峙する二人。スポットライトのように注ぐ直射光と、それによって生じる濃い影が、強いコントラストをつくりだしている。恵理の古風な容姿が相まって、まるで古い映画のワンシーンのようだ。

学ランとセーラー服姿の美男美女。暗闇に乗じての逢引。舞台は大正時代か。身分を越えた二人の若者の悲恋。

鈴木は夢中になって見つめていた。

ただただじっと見つめる二人。言葉はいらない。身分さえも、彼らをひきさくことはできない。

いいんだね。

ええ、いいの。

駆け落ちを決意する二人。このまま、東京駅に行き、列車に飛び乗るのだ。そして、誰も知らない土地へ行こう。最果ての北の国もいいだろう。二人なら、どこだって——愛と希望に胸を膨らませる若者。しかし、現実はそう甘くはないのだった。

どうやって、彼らの居場所を……いや、彼らの計画を知ったのだろうか。彼らの愛の逃避行を阻止すべく現れた、リーゼント頭の男。どこからともなく現れて、「この野郎!」と突撃してきたのだ。

「って、なぜリーゼントー!?」

鈴木は思わず大声をあげて頭をかかえていた。

バッと隣を振り返れば、そこにもうよっちゃんの姿はない。

「いつのまにぃ!?」と動揺に声を荒らげて、あわてて立ち上がる。

「なんて、無計画っ!」

草むらから飛び出してベンチを跳び越えようと思ったが、跳躍が足りずに脚がベンチの背にひっかかった。そのまま、背もたれをでんぐり返しするかたちで転げ落ち、どさっと地面に落ちる。タイミングよく、「きゃあ!」と可憐な悲鳴が聞こえたが、自分を心配し

てのものではないだろう、と思った。
あわてて顔をあげると、ちょうど、曽良がよっちゃんに殴られるところだった。
「ふ、藤本くん！」

平均的な愛の告白

街灯が照らす地面に、どさっと倒れる曽良。
「よっちゃん!?」
しなやかな指先で口許を隠すようにして、恵理は裏返った声をあげる。
「恵理ちゃんにちょっかいだすんじゃねぇ!」
肩で息をし、よっちゃんは血走った目で曽良を睨みつけた。曽良を殴った拳はブルブルと小刻みに震えている。
「ちょっかい?」と、殴られた頬を左手でおさえつつ、曽良はにんまりと笑んだ。「俺の第二ボタンを狙ってたのは誰だったっけ?俺とえりちんがうまくいくのを望んでたんじゃないの?」
「それは……」
ぐっとよっちゃんは顎をひいた。その隣で、恵理が心配そうな表情を浮かべて「よっちゃん」とか細い声でつぶやいた。
「大丈夫、俺は女の扱いには慣れてるからねぇ」
妖しげな笑みをその顔に残しつつ、曽良はゆっくりと立ち上がる。右拳をポケットにつっこんで、得意げに肩をすくめた。
「悪いようにはしないさぁ。たっぷりかわいがってやるよ」
「んだと!?」と叫んで、よっちゃんは曽良の胸倉につかみかかる。
「もう一度言ってみろ、このやろう」
「悪いようにはしないさぁ。たっぷりかわいがってやるよ」
「てんめぇっ!」
よっちゃんの怒号があたりにこだまする。
「てか、なんで君が出てくるの?」臆する様子も見せずに、曽良はさらにけしかける。「関係ないでしょう。黙っててよ」
その瞬間、よっちゃんの目の奥で何かが光った。曽良の胸倉をつかむよっちゃんの両手に力がこもる。腹痛でもするかのように、その強面をしかめ、

「俺は恵理ちゃんにぞっこんなんだっ！　黙ってられるかよっ！」
しん、と静まる公園。
恵理の頬が真っ赤に染まった。
ざあっと春の風がふきぬけて、よっちゃんのリーゼントをそよがせる。
「よっちゃん……」
顔にかかる黒髪を白い手でよけ、恵理はそれをそっと耳にかけた。その頬はほんのりと桃色に染まっている。
「わたし……」と葉のすれる音にも負けそうな小さな声でつぶやいて、恵理はうつむいた。
よっちゃんは耳まで赤くして、「ちっ」と舌打ちした。曽良を押し飛ばすようにして胸倉から手を離すと、気まずそうな表情でそっぽをむく。
「なんでもねぇよ。独り言だ。気にしなくていいからよっ」
漂う、重苦しい空気。木々だけがざわざわと噂話をしている。そんな中、
「わたしも、ラガーマンにぞっこんだよ」
風にまぎれて、鈴を転がすような声が流れていった。まるで、春の妖精が囁いていったかのような、幻聴にも思える声。
よっちゃんは目を見開いて「え」とすっとんきょうな声をもらす。ばっと上半身を反転させ、うつむく少女を充血した瞳に捉える。
「い、今……なんて……」
すると、黒髪の少女は肩をゆらしてくすくす笑った。顔をあげると、そっと人差し指を口許にあてる。
「独り言」
オーバーヒートでもしたのだろうか。ゆでだこのように赤面したよっちゃんは棒立ちのまま硬直した。

さて。その二メートルほど離れた場所では、一人の少年が間の抜

けた顔で地面にはいつくばっていた。
「いつまで、寝てるのサ」
いきなり、呆れたような声が降ってきて、鈴木はハッと我に返る。完全に傍観者に徹していた。とっさに振り仰ぐと、そこにはにんまりと笑むアヒル口。
「ふ、藤本くん？　いつのまに、そこに！？」
そういえば、いつからか姿が見えなくなっていた。目の前で繰り広げられる青春ドラマに夢中になって、彼の存在を失念していた。
「脇役は引き際をわきまえないと」
軽い調子で言って、曽良は鈴木に手を差し伸べた。鈴木はその手を取る気にもなれず、「いいですよ」とつっぱねて自ら立ち上がる。
「にしても」汚れた学ランをはらいつつ、鈴木は曽良をジト目でにらむ。「残念でしたね。あんなことやこんなこと、できなくなって。どうやら、坂本さんが好きなのは藤本くんじゃなかったようです」
「ああ、そうだね」
「そうだね……て」
それだけ？　鈴木は豆鉄砲を食らった鳩のように面食らった。イケメンがラガーマンに負けた、決定的瞬間だぞ。もっと悔しそうにしてもいいじゃないか。
「さぁて」と、曽良は明るい声で切り出して、ポケットにつっこんでいた右拳を取り出す。「そろそろ、パスしてトライかなぁ」
「トライ？」
訝しげに鈴木が見守る中、曽良の拳がゆっくりと開く。そこに転がっていたのは――直径二センチほどの小さな円い物だった。
曽良はコインをはじくようにそれを親指で宙に飛ばす。
月の光を反射してくすんだ金色の光を放つそれ――じっくり見る必要もなかった。鈴木にはすぐ分かった。
「ボタン？」と、鈴木は目を丸くする。それも、自分たちが着ている学生服のボタンだ。
「俺がただで殴られると思った？」

曽良は回転するそれを宙でキャッチして、そのまま、よっちゃんの足元めがけて放り投げた。

そのゆくえを目で追っていた鈴木だったが、いきなり腕をつかまれ、

「俺たちはベンチ入り」

くすりと笑う曽良によって、ベンチ裏の茂みへとひきずり戻された。

平均的な愛の告白（後書き）

＊トライとは、ラグビーの得点方法の一つです。アメフトのタッチダウンみたいなものです。

平均的なトライ

コロコロと足元に転がってきた、突起物のついた円いもの。先に気づいたのは、恵理だった。

「あら」と小首を傾げてしゃがみこみ、そっと拾い上げる。「ボタン？」

よっちゃんはとっさに自分の学ランを見下ろした。そして、「あ！」と驚きの声をあげる。気づいたようだ。――第二ボタンが消えていることに。

「それ、俺のみたいだ」

立ち上がった恵理に、よっちゃんはそう告げた。

「ああ」と、安心したように恵理は微笑んで、よっちゃんにボタンを差しだす。「気づいてよかったね」

「お、おう」

まだよっちゃんはどぎまぎしている。コマ送りのような違和感ある動きをしながら、ボタンを受け取ろうと腕を伸ばした――のだが、突然、その手は宙でぴたりと止まった。

電池でもきれたのだろうか、と思ってしまうほど、いきなりだった。

ボタンの上でホバリング。ぷるぷると震えるだけで動かない。ボタンに触れたいのか、触れたくないのか。

さすがに不審に思ったのだろう。恵理は顔を上げた。そして、ぎょっとする。

「よ……よっちゃん？」

清楚な顔があからさまにゆがんだ。

そこには、憤怒の表情を浮かべて口を引き結ぶ吽形像（うんぎょう）がいたのだ。

ゆげでもでてきそうに顔は赤く染まり、ボタンを睨みつける目は血走っている。このまま、こめかみの血管が切れるんじゃないか、と心配になるほどの険しい表情。

「ど、どうかした？」
　動揺もあらわに、恵理は及び腰で訊ねた。――すると、吽形像の口がくわっと開き、
「いらねぇよ！　もう卒業だしな。別にボタン一つなくたってかまわねぇからよ！」
「え、でも……」
「いらねぇって！」よっちゃんはふいっと恵理から顔をそらす。「お、お前……お前、捨てといてくれよ！　俺、別に第二ボタンとかなくてもいいしよ。第二ボタンとか、中途半端でかっこわりぃし。男はやっぱ一番を目指すべきだからよ、第二ボタンとか、なんなのー？　て感じだしよ」
「第二……」と恵理は目を丸くした。持っているボタンを見つめる。そこに刻まれているのは、春の門出を象徴する桜の花。その真ん中には「中」という文字。
　くすっと唇から笑みがこぼれた。
「分かった」恵理は腕をひき、ボタンを胸に抱きしめる。この三年間、よっちゃんの心臓の鼓動を聞き続けたボタンを。「ありがとう」
「べ、別に、お礼とか……俺、ラガーマンだし、第二ボタンとかいらねぇっつうか」
　よっちゃんは相変わらず恵理から顔をそらしたまま、頭をかいた。

　その様子を茂みの中からのぞいていた二人は、
「なんか……むしょうにかゆいんですけど、体中」
「蚊のでる季節はまだなのにねぇ」
　鈴木は首筋をかきむしり、その隣で曽良は涼しい表情を浮かべていた。
「で、どういうことですか？」
　鈴木は責めるような視線を曽良に向ける。
「なにが？」
「なにが、じゃないですよ。この妙に古めかしい青春ドラマですよ

！」

びしっと鈴木は茂みの向こう、できたてほやほやのカップルがいる公園を指差す。

「いったい、どーなってるんです？　坂本さんはあなたのこと、好きだったんじゃないんですか！？　なんでいきなり、イケメンからリーゼントに路線変更してるんです？　春のせいですか？　春の陽気にやられたんですか？」

ははは、と曽良は笑った。子どもをからかうような笑顔だ。

「えりちんがいつ、俺のことを好きだなんて言ったの？」

「それは……」

たしかに、恵理本人から聞いたわけではない。しかし――

「ミサンガ！　坂本さんにミサンガもらったんでしょう？　よっちゃんさんが見たって……」

すると、曽良は「ミサンガねぇ」ともらして、ちらりと公園のほうへ視線をずらした。それからくいっとあごをしゃくる。

見てみなよ、と言いたげだ。

鈴木は――気が進まなかったが――促されるままに、曽良の視線の先に目をやる。

そして、「あ」と驚きの声をあげた。

ちょっと目を離したすきに、古めかしい青春ドラマは、さらに己の道をつきすすんでいたようだ。

セーラー服の少女が、リーゼントのラガーマンの右手首に何かを結びつけている。赤とピンクの糸が結われて一本に繋がった輪。

「ミサンガ」

鈴木は思わずつぶやいていた。

「好きな人の手首の太さが分からない、ていうから、俺がサンプルになってあげただけだよ。そこをちょうど目撃されてたんだねぇ。悪いことしちゃったな」

「サンプル？」

鈴木は瞠目して振り返る。

「休み時間、いつもラグビーの本を読んでたんだ。女の子なのに珍しいと思ってたんだよね」

いきなり真面目な声色で語りだした曽良。

茂みの向こう、街灯（スポットライト）に照らされる初々しいカップルを見守る眼差しは、温かみに満ちている。

「話しかけたらいろいろ相談されてね。ミサンガの件もそう。まあ、相手が誰か、までは教えてくれなかったんだけど……きっと彼だろうな、て例の一件で思ってさ」

鈴木はぴくりと眉を動かす。そういえば……と、『例の一件』を思い出す。

――君のをあげればいいじゃない。

曽良はよっちゃんにそう言っていた。

てっきり、イケメンの世間知らずな一言かと思ったが……恵理の『本当の気持ち』を知っていたというなら、話は別だ。あれは純粋にアドバイスだったのか。

いや、待てよ。ということは、

「全部、芝居だったんですか！？」

疑問が全て飛び散った。曇り空が一気に晴れ渡ったような感覚だった。

しかし、代わりに、鈴木の心に苛立ちの雷雲がもくもくとたちこめてくる。

「俺を騙したんですね！？」

「なんのこと？」

「階段での嘘八百ですよ。なにが、あんなことやこんなこと、ですか。さては、よっちゃんさんを呼び出させるために、俺を挑発したんでしょう」

思い返せば、曽良の言動は妙だった。

――七時に、駅前の公園で待ち合わせかなぁ。

そうだ。冷静になってみれば、なんだ、あの違和感ある独り言は。そういえば、芝居がかっていたような気もする。

鈴木は確信した。自分はまんまとのせられていたのだ。気づかぬうちに、『がっかりイケメン』が企画、演出の青春ドラマに強制参加させられていたのだ。

「殿が思ったとおりのお人よしで助かっちゃった」

えへ、とでも言いそうな笑顔。自分が女だったら、ここで頬を赤く染めて二センチほど宙に浮いたかもしれない。それほど、愛らしい笑顔だった。

鈴木はもはや呆れて怒る気が失せた。

がっくりと頭を垂らして「もういいですよ」と諦めたような声をだす。

「でも、なんでこんな回りくどい手を？　直接、坂本さんに言えばよかったじゃないですか。相談乗ってたんでしょう」

そうすれば、自分が不良の巣窟に飛びこむ必要もなかったし、純情リーゼントの恋愛相談にも乗らずにすんだ。卒業を三日後に控えて、ここまであわただしく走り回ることもなかったのだ。

しかし、曽良は不思議そうに小首をかしげた。

「直接、なんて言うのサ？　君の想い人は君のこと好きみたいだよ、よかったね、て？」

ずばり指摘され、鈴木は面食らった。

確かに、それは無粋というものだろう。

「俺はおせっかいはするけどね。気持ちを伝えるのは本人じゃなきゃ。見たでしょう、えりちんの嬉しそうな顔。俺のおせっかいであれを奪うのは気がひけるよ」

鈴木の脳裏に頬を赤らめる恵理の顔がよぎった。たしかに、すごくかわいかっ……いや、いい顔をしていた。

曽良の言うとおり、本人に言われたからこそ、の歓喜の笑顔に違いないだろう。

しかし、それよりも、だ。曽良が正論を言った――それはまるで、赤ん坊が初めて立ったときの驚きと感動に似ている。たぶん。少なくとも、鈴木はそう思った。

「それにしても」と曽良は低い声できりだした。「幸せだよねぇ。ありのままの自分を見てくれる人がいる、ていうのは。あこがれちゃうな」

「あ、あこがれる？」

一瞬、耳を疑った。それは本当に、藤本曽良から出てきた言葉だろうか。

なにを隠そう、彼こそ、あこがれの的ではないか。

容姿、頭脳、運動神経、全てにおいてずば抜けている。性格だって、こうして他人のために一芝居うつくらいだ。事実、悪い噂だって聞かなかった。付き合っていた女子がなにやら不満をもらしていたくらいだ。

そうだ、女子！　そもそも、彼は今までいったい何人の女子と付き合ってきたというんだ。具体的な数までは知らないが、きっと膨大だ。まさに、星の数ほど、てやつだ。

なにをうらやましがることがある？

クラスの連中にさえ、苗字を覚えられていない自分はどうなる？

鈴木だぞ。鈴木なのに覚えてもらえないのだ。『ふくだ』か『ふくた』で間違えられるならいい。『すずき』が『たなか』と間違えられるのはどうなんだ。

もはや、言い訳のしようがない。発想を転換する余地もない。

誰も自分を見てくれないのは自分のほうだ。

「藤本くんはいつも注目を浴びてるじゃないですか」

自分とは違って――鈴木は言いたいのをぐっとこらえた。

曽良はため息混じりに微笑すると、感慨深げに夜空を振り仰いだ。

「俺、誰かと付き合うと、いっつもふられちゃうんだよねぇ」

思わぬカミングアウトだった。

いつもふられる？

「君が？」と、ずばり鈴木は口にしていた。

「こんな人だとは思わなかった、て言われちゃうんだよねぇ。なぁんか期待を裏切っちゃうらしい」

愚痴っているような口調ではなかった。ただ、純粋に不思議に思っている――そんな感じだ。

「皆、なにを期待してるんだろうね。俺はただの変人なのに」

曽良は肩をすくめてそう言った。

鈴木は瞬きも忘れて呆然としていた。期待――と反芻する。
心当たりのない期待を裏切ってしまう。なぜか、いつも落胆させてしまう。それが繰り返される日常。

ああ、なるほど。
ようやく、鈴木は理解した。
いくら注目を浴びても、その目に映っているのは、彼ではなくてその殻が創りだす虚像（アイドル）なんだ。
そうか。だから、彼は――

「みんな、がっかりするんだよね。ありのままの俺を知ると」

『がっかりイケメン』はそうつぶやいた。

平均的ながっかりイケメン（後書き）

前編はこれにて終了です。次話から後編です！

非日常的な呼び出し

うららかな春の朝。桃色の花びらが舞う校庭で、春風が生徒たちとたわむれている。少女たちの黒髪を撫で、スカートをひらりとめくり、「よくやった」とにやける少年たちとハイタッチ。

頬杖をついてそれを見下ろし、鈴木は穏やかな笑みを浮かべていた。

ああ、セーラー服っていいなぁ――そんな心情が表情からにじみでている。

しかし、その眼差しにはどこか哀愁がただよっていた。まるで明日にでも遠くへ旅立つかのようだ。

それもそのはず。

彼にとって、こういった「うふふ、あはは」な風景は見納めなのだから。

期限はあと二日。卒業式まで。眺めているだけで頭の中にお花畑が広がるような光景とは、この校舎とともにお別れだ。

そう、この春、鈴木が向かうのは、お花畑とは無縁の土地。もはや雑草さえも芽生えない永久凍土、『男子校』。

それも、不良の溜まり場、といわれる青春の墓場。バラ色の青春なんて望めやしない。いや、もしかしたら、ラグビー部にでも入部すれば、コーチと熱くぶつかりあいながらも、奇跡的に全国大会に出場して、最後は夕陽の前でチームメイトと泣きながら円陣を組む――なんていう青春を味わうことができるかもしれない。

ある意味、『花園』へは行けるが、ばら色ではないだろう。

だからこそ……だからこそ、鈴木は中学校生活をこのまま終わらせるわけにはいかないのだ。これからツンドラ地帯に向かうというのに、心の中が冷え切ったまま向かっては凍りついてしまう。

何か、思い出の平均越えをしなくては。永久凍土の中、すがりついていられる、心のホッカイロを手に入れなくては。

となると、やはり――

そのときだった。噂をすれば、なんとやら。

校庭を見下ろしていた鈴木の目が見開いた。その瞳に映りこんだのは、一人の少女。桜の花びらに祝福されながら、校門をくぐり校庭へとスカートをなびかせて入ってくる。

まさに春の妖精。

彼女の登場に春風までが騒ぎ立て、舞えよ踊れよ、と花びらにはやしたてている。

そっとウェーブがかった黒髪を手で押さえ、眩しそうに空を振り仰ぐ。その仕草の、なんと優雅なこと。

ひらひらと舞うスカートからのぞく脚の、なんと白くしなかやなこと。

その愛くるしい笑顔はあたりの花をいっせいに咲き誇らせてしまいそうだ。

彼女が現れると、景色が一瞬で煌びやかになる。――少なくとも、鈴木にはそう思えた。

ここが平安時代だったなら、今、この瞬間、いったい何人の男子生徒が和歌を詠んでいただろうか。

藤本砺波――この学校のアイドルにして、鈴木の想い人。

鈴木が彼女に想いを寄せるようになってはや二年。鈴木が彼女と会話を交わしたのは一度だけ。それが出会ったきっかけでもあるのだが。

そのときの、彼女の透き通るような麗しい声は未だにはっきりと鼓膜に残っている。

――お金貸して。

鈴木は瞼を閉じて、追憶の海にもぐっていた。
奥へ奥へともぐっていくと、その海底には夢のような時間が流れる竜宮城。そこで鈴木を迎えるのは、天使のような笑顔を浮かべる乙姫――砺波。
願わくば、もう一度。もう一度だけでもいい。あの笑顔を目の前で見たい。せめて、それだけでいい。それが叶えば、この平均的だった中学校生活に区切りをつけられる気がした。真に『卒業』できる気がした。
自然と鈴木の拳に力がこもった。
そうだ。このまま平均的で終わるわけにはいかない。当たって砕けるくらいの度胸を見せてこそ、男じゃないか。ここで勝負せずに、いつ男になるのだ。
俺は……卒業するんだ！
かっと瞼を開き、決意を胸に威勢良く立ち上がった――そのときだった。
「田中！」
突然耳元で叫ばれ、鈴木はがくんとバランスを崩した。せっかく、勢いをつけたというのに。出鼻をくじかれてしまった。
不機嫌そうに眉をひそめて振り返り、
「だから、俺は鈴木――」
言いかけて、鈴木は言葉をつまらせた。
春色に染まっていたはずの顔が一気に青ざめる。たらりと汗が頬をつたう。
「あ……」と顎がはずれたかのように口があんぐりと開いた。
なんということだろう。竜宮城から戻ると、現実は様変わりしていたのだった。
あたりはおそろしいほど静まりかえり、目の前には二人の不良。ひょろりとしたモヒカン頭と、端整な顔立ちをした茶髪のロン毛。見覚えがあった。

「よう、田中。ちょっと顔貸せやぁ」と、モヒカンが顎をつきだし、鈴木を見下すようにして睨みつける。

「昨日の礼がしたくてなぁ」と、ロン毛が眉間に皺を寄せつつ、唇の片端をくいっとあげた。

間違いない。彼らはあの純情ラガーマン・よっちゃんの不良仲間だ。

昨日の放課後、よっちゃんと一緒に、あの『がっかりイケメン』こと藤本曽良をカツアゲ（第三ボタンを）しようとしていたラガーマン。

田中……いや、鈴木は顔面蒼白で硬直した。

なんてこった。俺、また……いや、まだ巻きこまれてる。――もはや、それは懸念というより確信だった。

鈴木の脳裏を藤本曽良がスキップで通り過ぎていった。

非日常的な呼び出し（後書き）

男子校へのひどい言い様、コメディということでお許しください。
鈴木の被害妄想（？）です。

どん、と背中に衝撃が走った。宙からひらりと桃色の花びらが落ちてくる。

「てめぇ、よっちゃんに何しやがったんだ!?　夕べからよっちゃんからメールが返ってこねぇんだよ！　ええ!?」

「うちの部室来て、よっちゃんをさらったんだろ。恵理ちゃんが危ない、とかデタラメいいやがってよぉ。よっちゃんの純粋な恋心をもてあそんで、なにしやがったんだよ!?　ええ!?」

「なんとか言えや、田中ぁ！　ええ!?」

とりあえず、鈴木です。ええ。

そう言おうかとも思ったが、そこまでの度胸は鈴木にはなかった。名ばかりのラガーマンだが、それでも不良二人組は鈴木に比べればはるかに長身でたくましい体つきをしている。中学三年男子の平均身長、一六五．五センチ、同じく平均体重、五四．七キロの鈴木からすれば、まるで巨人だ。逆ガリバー体験だ。そんな二人に囲まれては鈴木に制空権すらない。

事実、ちょっと肩を押されただけで、後ろに吹き飛んだ。背後に控えていた桜の木が受け止めてくれていなかったら、今ごろ地面にしりもちをついていたことだろう。

見た目どおりの体力差がある。逃げ道もない。絶望的だ。

「おう、なに、シカトきめちゃってんだよ」

「ひえっ」

いきなりモヒカン頭に胸倉をつかまれ、鈴木は震え上がった。誤解されているのはあきらかなのだが、それを説明する余裕もない。

「いやいやいやいや」と情けない声をもらしながら、顎が高速で上下するだけだ。

「ふざけやがって！」

ふざけてはいないのだが、そう釈明する余地もない。

モヒカン頭はぐいっと鈴木の胸倉を力いっぱいひきよせ、右手を振り上げた。――殴られる。鈴木は反射的に目を瞑る。

痛みに備えて歯を食いしばりつつ、鈴木は既視感を覚えていた。前にもこんなことがあったような気がしていた。校舎裏で、こうして桜の木を背に不良たちにおいつめられ……

いや、違う。

鈴木の頭の中でキラリとあるイメージが浮かびあがった。

校舎裏。焼却炉の傍ら。桜の木。不良三人組に囲まれ、カツアゲされている少年。

自分ではない。自分はその光景をのぞいていた第三者。校舎の陰から息をひそめて見守っていたのだ。

そうだ、昨日の放課後。そうして、あの少年と再会を果たしたのだ。そして、巻き込まれる羽目になった。あの少年――

「殿じゃないか～」

とうとつに、のんびりとした声が降ってきた。ぎょっと瞼を開くと、モヒカン頭が「うわあ」と叫んで、鈴木の胸倉から手を離したところだった。

そのまま、モヒカン頭はボクシングのステップでも踏むかのような軽やかな足取りで後ろに飛びのく。その視線は鈴木よりもはるか上に向けられていた。

なんだ？　と見上げるよりも先に、鈴木の目の前に何かが舞い降りて視界をさえぎった。ゆるやかな風が足元から吹き上げて、鈴木の鼻を撫でた。

鈴木と不良の間を阻んで聳え立った屈強な壁。

桃色の羽根を散らして、すらりと鈴木の前に立ちはだかる人影。まるで翼を失って堕ちてきた天使のごとく、神々しいその背。

短い黒髪が、桜の木が奏でる葉の音にあわせて揺れている。

鈴木は息を呑んでいた。後姿にさえ見とれてしまう。なんだろうか、一瞬にしてまわりを飲みこんでしまうような、この圧倒的なオーラは。

これが、イケメンか。

「おはよう。また会ったね、殿」

くるりと振り返り、桜の木から落ちてきたイケメンはにこりと微笑んだ。

「藤本……曽良」と、鈴木はなんとも力ない声でその名をつぶやいていた。

日本人離れした彫りの深い顔立ち。そういえば、ハーフだとか、クオーターだとか、そんな噂もあったな。なるほど、透き通るような瞳も、どこか色が薄いような気がする。こげ茶というよりは、明るい茶色だ。

目の前に不良二人組がいるというのに、ゆるく微笑む緊張感のないアヒル口。

白馬に乗った王子。そのフレーズがここまで合う人物が、他にいるだろうか。どこからともなく現れて、悪党を退治する。まさにヒーローだ。――って、ちょっと待て。

鈴木は目が覚めたかのようにハッとした。

「どこから現れた!?」

非日常的な校舎裏（後書き）

平均身長、平均体重は、平成二十二年度、東京のものを参考にしました。

非日常的な回し蹴り

いきなり降ってきたがっかりイケメン。鈴木は驚愕し、あわてふためいていた。

「上？　上から落ちてきた？　桜の木？　なんで？　なんで木の上にいたの！？」

それがもはや独り言なのか、質問なのか、鈴木自身にも分からなかった。

「いやぁ」と、曽良は朝にふさわしい清々しくさわやかな笑顔を浮かべる。「ハチミツ取りに来たんだよぉ」

「ああ、ハチミツですか。って、どこぞのクマですか、あなたは！？」

そういえば、昨日も「一緒にハチミツをとらないか」と不良たちにそそのかされて呼び出されたのではなかっただろうか。鈴木は頭痛のようなものがした。とりあえず、自分を落ち着かせるためにも、瞼を閉じ、こめかみをおさえる。

まさか、あの不良たちの嘘をまだ信じていたとは。蜂の巣なんかあるか。鈴木は心の中で悪態づいた。

「おいおい、俺たちをシカトしてんじゃねぇぞ」

そういえば、自分は不良にからまれているのだった。突然のイケメンの出現にうっかりしていた。鈴木は思いだしたようにハッと目を開く。それとほぼ同時に、曽良も顔を前に向きなおした。

思わずあとずさってしまったことにプライドが傷ついたのか、モヒカン頭はひどく憤慨しているようだった。鼻の穴をひくつかせながら、パキポキと指を鳴らして、曽良に歩み寄ってくる。

その隣で、長髪の中級イケメンは「やっちゃえ、はるちゃん」とはやしたてている。どうやら、モヒカン頭ははるちゃんと言うらしい。

任せとけ、と言わんばかりに、はるちゃんは右拳を天に向けてか

かげた。
「藤本曽良。あとでお前のとこにも挨拶に行こうと思ってたんだ。手間がはぶけたぜ。飛んで火に入る夏休み、てなぁ」
ああ、それはとても暑そうだ。鈴木はそう言いたいのを、ぐっと抑えた。
それにしても、当たり前のように話が進んでいる。曽良が桜の木から降ってきた事実は気になっていないようだ。鈴木はなんだか彼らが羨ましくなった。
「昨日はよっちゃんの手前、黙って退いたがな、今日はそうはいかねぇぜ」
曽良の目の前で立ち止まり、はるちゃんはステップを踏み始めた。
「はるちゃんはボクサーだったんだからな。イケメンもこれでおしまいだぜ。今のうちにそのきれいな顔を写真に残しておけよ」
中級イケメンが自慢げにけらけら笑っている。自分のことでもないのに鼻高々だ。相当仲がいいのだな、と鈴木は感動すら覚えていた。
しかし、のんきに状況を分析している場合でもないだろう。
はるちゃんはステップを続けつつ、右拳を顎の前に、左拳を目の前に構えている。様になっている。ボクシングをやっていたのは本当らしい——鈴木でもそれが分かった。
確かに、昨日、曽良はよっちゃんを一本背負いでふっとばしたが、どこまで柔道の心得があるのかは未知数だ。
「藤本くん、大丈夫なんですか？」
遠慮がちに背後から声をかけるが、曽良は振り返る様子もない。
「ふぅむ」と悩ましげな声をもらして桜の木を見上げるだけ。
「お花見してる場合じゃないでしょう！」と、鈴木はたまらず叫んでいた。
「よそ見してんじゃねぇよ！」
言わんこっちゃない。
はるちゃんの目つきが変わった。ステップが乱れ、その間隔が縮

まった。
鈴木はあわてて曽良のひじをつかみ、
「藤本くん、ここは逃げたほうが――」
「殿はさがってて」
「え？」
聞き返す暇もなく、いきなり、景色がびゅんと流れた。
気づけば、宙に浮いていた。曽良に胸倉をつかまれ、横に放り投げられたのだ。あまりのことに、声もあげることはできなかった。
どさり、と地面にしりもちをついた鈴木の視界の中で、はるちゃんが曽良に殴りかかる。
ひゅおっと空気を切り裂くはるちゃんの右ストレート。その気流に乗って、桜の花びらが螺旋を描いて舞った。
瞬きもできなかった。
殴られた。――少なくとも、鈴木はそう思った。
それほど、紙一重だったのだ。

ひらりと舞う木の葉のように曽良は身を翻してはるちゃんの右ストレートをやりすごし――その回転を利用して、背後の桜の木に思いっきり回し蹴りを食らわした。びりびりとその振動が地面を伝わって鈴木の手に届いた。すさまじい脚力だ。
しかし、なぜ、桜の木？
「へ」と、その場にいた誰もが間の抜けた声をもらした。
桜の木も驚いたことだろう。不満を声に出す代わりに、枝を大きく揺らして葉を鳴らした。
そして、次の瞬間。
ぐしゃり、と妙な音がした。
「ぬ！？」とモヒカン頭の唸り声が続く。そして、モーター音のような不快な振動音があたりにこだまする。
「な……」

鈴木はあんぐりと口を開け、その信じられない光景に硬直した。
モヒカン頭の針山の先――そこに楕円形の塊が突き刺さっていたのだ。その周りを、大量の黄色い何かが飛び交っている。突然の引越しに大騒ぎのようだ。ブンブン、ブンブン、と不平不満が飛び交っている。
モヒカンにつきささっているもの。間違いなく、蜂の巣だった。
「嘘からでた真ー！？」
鈴木は目をむいて、叫んでいた。

非日常的な保健室

――お花見してる場合じゃないでしょう！

鈴木はその一言を、安直だった、と振り返る。

あの一瞬で、彼は曽良が見つめる先を桜の花だと決めつけてしまった。あの瞬間、彼は自らを思いこみという罠にはめてしまったのだ。

もし、あのつっこみさえなければ、気づけていたかもしれない。一呼吸置いて冷静に考えていれば、悟れたかもしれない。曽良が見つめていたのは蜂の巣で、うまくモヒカンに刺さるように距離の計算をしていたことに――

「気づくかーっ！」

瞼をくわっと開いて鈴木は飛び起きた。

「て、あれ？　ここは……」

いきなり消毒液の匂いが鼻腔を刺激して、鈴木は顔をしかめた。どこか遠くから、合唱が聞こえてくる。さようなら、という歌詞。卒業式に歌う曲だろう。

鈴木を取り囲む白いカーテン。パリパリに硬い、他人行儀のシーツ。そして、暖かみのない毛布。

なんとも記憶に新しい。

自然とため息が漏れていた。

「またか」

鈴木はがっくりと頭を垂らした。それに応えるように「よお」と隣から野太い声が聞こえてくる。

「追いかけてきた蜂から逃げようとして転んで頭を打ったんだとよ」

「あぁ……なるほど」

とりあえず、蜂に刺されたわけではないということか。

それにしても、二日連続で頭を打って保健室に運ばれるとは。し

かも、目を覚ませば隣にリーゼント。
鈴木は鼻で笑った。やれやれ、昨日と全く同じだ。
「って、リーゼント、ちがーう！」
鈴木は思わず、傍らにたたずむ人物を指差して叫んでいた。
がっしりとした体格の、中学生とは思えない老けた……貫禄のある顔立ちの少年。
その迫力のある風貌と古めかしいリーゼントは、忘れることなどまず不可能。まして、夕べ、恋愛相談など受けてしまってはなおさらだ。
「うるせぇな。頭打っておかしくなったのかよ？」
もはや、そう願いたい。――ぎろりと鋭い目つきで睨まれ、鈴木は強く思った。
どうなっている。なぜ、ここにリーゼント・ラガーマンこと、よっちゃんがいるのだ。ここまで昨日と同じ流れできていて、なぜそこがリーゼントである必要がある？
もう曽良と関わりたくはない、と思っていたはずなのに、鈴木は無意識に曽良の姿を探していた。しかし、保健室に人気はない。四つあるベッドで、右から二つ目を鈴木が使っている。あとは空っぽ。寂しいものだ。いや、保健室に人がいないのはいいことか。保健医までいないのは妙だが。
とりあえず、頼りになる人物はいない、ということだ。ここは自分ひとりで切り抜けなければ。
「あ、あの、ど、どうして、ここに？」
頬をひきつらせ、鈴木は訊ねた。これでも勇気を振り絞っている。声がでてきただけでも自分を褒め称えたいくらいだ。
「決まってるじゃねぇか」にやりとよっちゃんは怪しく笑んだ。「話は全部聞いたぜ。俺のダチが迷惑かけたらしいじゃねぇかよ。その謝罪だよ」
「め、迷惑だなんて……」
まさか、これはいわゆる、お礼参りというやつか。鈴木の背筋に

悪寒が走った。
「二人とも蜂に刺されまくってよ。さっき早退してったよ」
よっちゃんはゆらりとベッドに近寄って、第二ボタンが欠けてできた学ランの隙間に手を差し入れた。
鈴木は目を見開いて固まった。さあっと顔が青ざめる。
いったい何を取り出すつもりだ。内ポケットに忍ばせた不良の七つ道具か。
鈴木の頭に浮かぶのはあらゆる凶器。チェーン。ナックル。バリカン。ハサミ。まさか、ナイフ？
「蜂の件は、重力のせいといいますか……」
あたふたとしながら鈴木は必死で弁解を始めた。両手をはためかせ、まるで飛び立つ鳥のよう。
無論、よっちゃんを説得できるとは思ってはいない。せめて時間を稼げば「殿じゃないか～」という暢気な声が聞こえてくる気がした。しかし――
「目障りな藤本曽良は生徒指導室で尋問中だ。邪魔しには来ねぇ」
鈴木は見事に撃ち落とされた。こうなってはもう、まな板の上のスズキである。
「つまり」と、よっちゃんはするりと学ランから手を抜き出す。「心置きなく、たっぷりお前に礼ができるってわけだぜっ！」
「ひいっ」
よっちゃんが取り出したものを確認するより早く、鈴木はとっさに頭を抱えてうずくまっていた。その脳裏によぎったのは、お歳暮に舌打ちする母の姿。
「お気持ちだけで結構ですーっ！」
ひょんなことから関わってしまった不良に保健室でめった打ちにされ、鈴木は結局卒業式にも出れずに中学生活を終えることとなった。後々、クラスメイトたちからは「目立たない普通の人だったのに」と残念そうに語られることになる。
その様子がまざまざと思い浮かび、鈴木は固く瞼を閉じる。

そんな目にあうくらいだったら、平均的に中学生活を終えたほうがまだマシだった。なんでこんなことに？　ああ、くそう。昨日、ここでがっかりイケメンとであったばかりに。ここであの少年と出会わなければ――

鈴木の頭の中を流れ行く後悔混じりの恨み言。果たして、その流れをせき止めたのは予想だにしない言葉だった。

「おい、何してんだよ？」
「へ」
予想に反して柔らかな声がして、鈴木は瞼を開いた。
何をしているって、きたるよっちゃんのパンチに備えているのだが。
「ほら、受け取れ」
受け取れ？　なにやら様子が変だ。腹をくくっておそるおそる顔を上げると、目に飛びこんできたのはよっちゃんの握りこぶし。思わず、「ひえっ」と悲鳴をあげて後ろに飛びのく。が、こぶしは追ってくる様子はない。それどころか、じっと大人しく待っているようだ。
きょとんとしていると、「悪かったな」とよっちゃんが苦笑した。
「夕べ、恵理ちゃんと電話してたらそのまま寝ちまって。あいつらからのメールに気づかなかったんだよな。そのせいで、あいつら、早とちりしたみたいでよ。俺がお前と藤本曽良にしめられたと思ったみたいだ」
「早とちり？」
そういえば……と、鈴木は思い出す。

――夕べからよっちゃんからメールが返ってこねぇんだよ！

どちらかは忘れたが、ラガーマンの一人がそう言っていたような気がする。
「安心しろ」と、よっちゃんは得意げに言い放つ。「さっき、話はつけといた。もうあいつらがお前を狙うことはねぇよ」
「はあ」
そう言われても、すんなり納得できるわけもない。

「とにかく、受け取れ。夕べの礼だ」
「……」
鈴木はごくりと生唾を飲みこみ、よっちゃんの拳を凝視する。
とりあえず、殴ろうという気配はない。自分に危害を加えようという気はない、と考えていいのだろうか。
いや、そう結論づけるのも早計にすぎるというものだろう。
なんといっても、相手はリーゼントだ。
もしかしたら、あのこぶしの中に凶器がしこまれているのかもしれない。自分を人質にとって曽良をおびき出す……なんともリーゼントがしそうなことではないか。
しかし、そうだとしても鈴木にどんな選択肢があるというのだろう。
「おら、手、出せよ！　受け取れねぇのかよ！」
そう言われてしまえば、「はい！」と叫んでいさぎよく右手を差し出すしかないのだ。
カタカタと震える右手が、よっちゃんの右こぶしの下へと伸びていく。それを血走った鈴木の目が見守る。
おそろしい。いったい、何が落ちてくるのか。
ふいに、にやりとよっちゃんが笑む気配がした。ハッとしたのもつかの間、手を引く暇もなく、よっちゃんの右手が開かれ、そして――
「へ」と、思わず鈴木は間の抜けた声をもらした。
痛みも何もなかった。それどころか、大して重さもない。
あまりに警戒しすぎていたせいか、それが何か気づくまで少し時間がかかった。じっと見つめる先で、手の平に横たわるの。赤い布地に包まれた細長い台形のようなもの。鈴木は目をぱちくりとさせ、小首をかしげた。
見覚えがある。これは……
「……お守り？」
「ただのお守りじゃないぜ！　恵理ちゃんおすすめの、効果バツグ

ンの恋愛成就のお守りだ」
想像すらしていなかった展開に、鈴木は絶句。唖然として固まった。
「ぁんだよ？　文句あんのか？」
よっちゃんの表情が険しくなって、鈴木ははっと我に返った。
「ありましぇん！」と叫んで、赤べこのように何度も頭を下げる。
「ありがとうございます、ありがとうございます」
へへ、と言いたげによっちゃんは頬を赤らめ鼻をかく。
「お前のおかげで、恵理ちゃんとうまくいったわけだからよ。お前は一応、俺と恵理ちゃんの恋のキューピッドっつうかよ」
「こ、恋のキューピッド？」
「そうだろうよ。お前がいなかったら、俺たちは付き合ってねぇんだし。だから、恵理ちゃんがよ、お前にも幸せになってほしい、て言ってさ。そのお守りを渡そう、て話になったんだよ」
「坂本さんが……」
つい、頬がゆるんだ。お礼にお守り、という発想は彼女らしい気がした。第二ボタンといい、ミサンガといい、なんとも古風な子だ。
ここにきて、ようやく鈴木は肩の力を抜いた。
考えすぎだったようだ、と苦笑い。よっちゃんの言う『礼』は、『お礼参り』のそれではないのだ、と確信する。リーゼントだからといって、深読みをしすぎた。
赤いお守りをぎゅっと握りしめ、鈴木は大きく安堵のため息をもらした。
まるでそれを見計らったかのようなタイミングで、よっちゃんは「さて」と満面の笑みを浮かべて腰に手をあてがった。「恵理ちゃんおすすめの恋愛成就のお守りを手に入れたんだから、お前も彼女をゲットしねぇとな」
「そうですね」
女の子のおすすめなら、きっと有名な神社のお守りなんだろう。
鈴木は目を細めて、赤いお守りを見つめる。鈴木は信心深いほうで

はない。お守りの力も信じてはいないのだが、恵理やよっちゃんの気持ちが嬉しかった。大事にしよう、と思った。

そう。このときはまだ、鈴木は気づいていなかったのだ。その手に握るお守りの、とんでもない効力を。

「そうと決まれば」と、気合たっぷりのよっちゃんの声が保健室に響き渡った。よっちゃんは左右の拳をたたきつけ、「お前、誰が好きなんだ!?」

「……は?」

非日常的なタッグ

「だ、誰が好きって……」
鈴木の頬がひきつる。嫌な予感が胃痛となって襲ってきた。
「いるだろうよ」とよっちゃんは鈴木に詰め寄る。「好きな女くらいよぉ」
「い、いませんよ！　好きな子なんて……」
慌てて鈴木は頭を振るが、よっちゃんが「ああ、そうか」と引き下がるわけもない。
「なんで隠すんだよ？」
「か、隠してませんよ」
もちろん、嘘だ。鈴木には好意を寄せる少女がいる。誰にも打ち明けたことなどないが。――いや、打ち明けられようはずも無い。学校のアイドルにほのかな恋心を抱いているなど。
「んだよ、てめぇ？　恵理ちゃんからお守りもらっといて、その態度はねぇだろう」
どちらかといえば、おしつけられたような気もするのだが。
「そんなこと言われても、いないんですよっ！」
「いない、で済むわけねぇだろ！？　恵理ちゃんは、そのお守りを信じてるんだよ！　おめぇに彼女できなかったら恵理ちゃんが悲しむだろうが」
どんな理屈だ、と鈴木は思ったが、そんな心のうちを叫ぶわけにもいかない。「そんなぁ」と震えた声を漏らすので精一杯だ。
よっちゃんの厳つい顔がさらに目前に迫り、リーゼントがまるで暗雲のように鈴木を覆う。
「はやく言わねぇと……」
ぎらり、とよっちゃんの目が鈍い光を放った。捕食者の目つきだ。
視界の隅で、よっちゃんの拳がぴくりと動き、鈴木はハッとした。
鈴木の野生の勘が働き――

「藤本砺波さんですっ！」
その声は、しんと静まり返った保健室に余韻を残して消え去った。
「藤本……」と、よっちゃんはとぼけた声を漏らす。「藤本……砺波？」
鈴木の顔は一気に赤く染まった。
なぜ馬鹿正直に砺波の名前を出してしまったのか。適当にありきたりな名前でも叫べばよかったのに。しかし、後悔先に立たず、というものだ。
しばらく、沈黙が続き、やがて――
「あっはっは！」
やっぱりか、と思った。笑われて当然だ。鈴木は固く目をつぶり、うつむく。が、すぐに違和感に気づいて瞼を開いた。
「この声……」
よっちゃんではない。
とっさに顔をあげると、いぶかしげな表情を浮かべるよっちゃんが。その視線の先をたどれば、ベッドを囲むカーテンに浮かび上がるひとつの影。
「そんなことなら、早く言ってくれればよかったのに」と、影は続ける。「水臭いなぁ、殿ったら」
「殿って……」
そんな呼び方をする人間は、この学校に一人しかいない。
腰に手をあてがい颯爽とたたずむシルエット。姿も見えないのに、その堂々たる佇まいにカリスマを感じてしまう。高貴なオーラが漂っている。
「藤本曽良！」と雷鳴のようなよっちゃんの怒声があたりに響き渡った。「よくも俺の前にツラ出せたな！？」
そういえば？？と鈴木は思い返して、顔色を曇らせる。よっちゃんはまだ、曽良が恵理に『あんなことやこんなこと』をしようとした、と勘違いしたままではないだろうか。
「やだなぁ。まだ、顔（ツラ）は出してないじゃないか」

なぜ、わざわざ挑発するようなことを言うのだ。よっちゃんのリーゼントが小刻みに揺れている。怒り心頭だ。怒りがリーゼントにまで伝播している。

青ざめる鈴木の眼前で、シャッと軽快な音を鳴らしてカーテンが開いた。

「やあ」と、姿を現した少年はアヒル口に暢気な笑みを浮かべて言い放つ。「具合はどう？」

そんな爽やかに問われても、この状況でどう答えろというのだ。というか、君のせいで悪化の一途をたどりそうだ。鈴木は心底そう思った。

「藤本曽良！　お前、夕べはよくも……」

「まあまあ、待ってよ」臆する様子はかけらもみせず、曽良は飄々とした様子で右手の平をよっちゃんに見せつける。「ここは一時休戦、といかない？」

「休戦？」

思わぬ言葉に、鈴木とよっちゃんの声が重なった。

「目的は一緒なんだからさ、共闘ってことで」

目的？　共闘？

ぽかんとしている鈴木の隣で、よっちゃんは何かに気づいたようだ。はたりとして、「そうか」とつぶやきほくそ笑む。

「ダブル藤本……か」

なるほど、とよっちゃんは腕を組む。

「お前のことは気にいらねぇが、鈴木（こいつ）には借りがあるからよ。役にたたねぇと承知しねぇぞ、藤本曽良」

「大丈夫。恋のキューピッドは慣れてるから」

鈴木を置いて話がどんどん進んでいっている。終電に乗り遅れたような焦りを感じて、鈴木は「何の話をしてるんです！？」と怒鳴った。

すると、二人はきらりと目を輝かせ、

「決まってるだろ。お前と藤本砺波をくっつけるんだよ」

「砺波とは長い付き合いだから、任せてよ、殿」
鈴木の口があんぐりと開く。まさか・・・・・・いや、そんな悪夢のようなことが起こりえるはずはない。
「泥舟に乗ったつもりでいていいからよっ！」
「そうそう、タイタニック、タイタニック」
どっちも沈むじゃないか――その心の叫びは、二人に届くはずもなかった。

非日常的な訪問者

卒業式を明日に控え、どことなく哀愁の香り漂う教室。そこでただ一人、青白い顔に恐怖をはりつかせる少年が。

ふとため息ついて、ちらりと視線をずらす。その黒い瞳がとらえたのは、机の上に置かれた恋愛成就のお守り――いや、彼にとってはもはや呪いのアイテムかもしれない。

昨日、これを受け取ってしまったがために……後悔ばかりが募る。しかし、何ができる。あのリーゼント・ラガーマンに「ノー」と言えるような度胸は彼にはない。

とりあえず、あれから、曽良もよっちゃんも姿を見せることはなかった。

――決まってるだろ。お前と藤本砺波をくっつけるんだよ。

――砺波とは長い付き合いだから、任せてよ、殿。

意気揚々とそう宣言し、保健室をあとにした二人。いったい、どこへ行って、何を企んでいるのか。できることなら、このまま姿を現さないでほしい。このまま、平穏無事に明日の卒業式を迎えたい。

そうだ。きっと、一晩寝て忘れてしまっているに違いない。あれはただのノリだ。本気なわけはない。

鈴木は「そうだよ」と自分に言い聞かせる。

学園の王子と番長を引き連れ、己の恋路を歩く――想像しただけでも意味不明だ。ありえるわけがない。

頬杖をつき、窓の外へと視線を向ける。今朝だけで、これで何度目かも知らないため息をつき――

「やあ、殿！」

「うわあ！？」

思わず、鈴木はイスごと後ろに転げていた。

ざわめく教室。無論、鈴木を心配して……というわけではない。
「きゃあ」という黄色い悲鳴。それに続く「藤本くんだ」という感嘆混じりの感激の声。
鈴木は血相変えて立ち上がると、突然現れた美少年を指差す。――そう、突然窓から入ってきたイケメンに。
「どこから現れてるんです!?」
「窓から」と窓枠に腰かけ、曽良は微笑む。
「それは分かってますよっ」
「じゃあ、なんで聞くのさ?」
理解できないな、と言いたげに小首をかしげ、曽良はひらりと華麗に教室に舞い降りる。窓から注ぎこむ朝日が後光のように彼を照らして、その姿はまるで天使に見えた。
だからだろう。教室中がしんと静まり返ったのは。
目をうっとりとさせ、頬を赤らめる女子生徒たち。言葉を失いあっけにとられる男子生徒たち。
唯一、鈴木だけが疲れ果てたようなげっそりとした表情を浮かべているのだった。
「放課後、駅前の公園」
唐突に、曽良は自信満々の笑みでそう言い放つ。周囲の視線を気にかける様子もない。ただ真っ直ぐに鈴木だけを見詰めている。
「は?」と鈴木が呆けると、曽良はくすりと笑って鈴木に顔を近づける。
「泥舟タイタニック作戦だよ」言って、片目を瞑リ、「クルーもそろえたからね」
小声で囁かれたその言葉に、鈴木の顔は一気に青ざめる。身体中がぴしりと凍りついた。
「それじゃ」
軽い調子でそれだけ言って、曽良は鈴木の肩を叩いて去っていく。
「おはよう、藤本くぅん」と、普段より一オクターブ以上高い同級生たちの声が背後から聞こえてきた。「なんで田中と……」と不思

議そうにぶつぶつつぶやく声が混じる。
しかし、もはや「俺は鈴木だ」とか、そんなことを言ってられる余裕はなかった。
鈴木は呆然と立ち尽くしていた。
泥舟タイタニック作戦――ここまで失敗しか匂わせない作戦名は他にないだろう。そんなネーミングセンスの持ち主が、どれほどの計画を立てられるというのだ。
それだけではない。さらに、不吉なのは……
「クルーって……」
頭に浮かぶのは、豪華客船の甲板で潮風にリーゼントをなびかせるよっちゃんの姿。
鈴木は頭を抱えて、大きくため息を漏らす。――まさか、曽良だけでなく、よっちゃんまでもやる気満々ということか。
もはや、逃げることもかなわない。「すっぽかす」とか「ばっくれる」とかいう言葉は鈴木の辞書にはない。
青春の終わりを告げる鐘の音が確かに聞こえた気がして、鈴木は力なく微笑んだ。――それはまるで全てを悟った菩薩のような笑みだったという。

非日常的な熱い友情

卒業式前日ということで、学校は昼まで。カラオケだ、前夜祭だ、と大騒ぎで教室を去っていったクラスメイトの中で、下校拒否に陥りかけたのが、この鈴木である。放課後に世にも恐ろしい予定の入ってしまった鈴木にとっては、こんな日に――というのが胸中だった。

「殿ー！　こっち、こっち」

あのアヒル口も見慣れたものだ。鈴木は重い足取りで、元気に手を振る少年のもとへと歩を進める。

こうしてのこのこと来てしまう自分が情けない。鈴木はがっくりと頭を垂らす。

昼下がりの駅前の公園。若いママたちが見守る中、子どもが駆け回るのどかな風景。しかし、一歩、茂みの奥へと足を踏み入れれば、そこは別世界。

「よぅ、鈴木ぃ」

「逃げたかと思ったぜ」

「俺らを待たせるたぁ、いい度胸だぜ」

ヤンキー座りでメンチを切る三人組がお出迎え。――助けたイケメンに連れられて茂みの奥へと来てみれば、声も出せない恐ろしさ。

鈴木はぴしりと凍ったように硬直した。

増えている。不良が増えている。リーゼントだけでなく、モヒカン頭に中途半端なイケメンまで。

やはり、今すぐ逃げようか。

「さぁて、クルーもそろったことだし」と、その場に似つかわしくない暢気な声が響く。「砺波とは一時に待ち合わせしてるから、練習できるのはあと十分くらいかなぁ」

「ま、待ち合わせ！？」

どきり、と心臓が鳴った。一瞬にして顔が赤くなる。

藤本砺波が――ここに来る!?　それも、あと十分後に。
「そ」動揺する鈴木の肩に手を乗せて、曽良はにこりと微笑む。「映画観る約束しといたんだ。大丈夫、砺波は必ず来るよ。タダ券がある、て言っといたから」
「え、いや……」
つい、『泥舟タイタニック作戦』の沈む気満々なネーミングに気を引かれ、大事なことを忘れていた。そういえば、この作戦って……
「ほ、本当に……俺、藤本さんに告白するんですか?」
小鳥でももっと大きな声が出るだろう。それくらいのデシベルで鈴木は訊ねていた。
この自分が藤本砺波に告白する――そんな絵空事がようやく現実味を帯びてきて、急に緊張し始めたのだ。
「俺はそのつもりでここにいるんだけどな?」
「!」
挑発でもしているような声色だった。ハッとして顔を上げれば、曽良の不敵な笑み。
鈴木は言葉を失った。
真っ直ぐに鈴木を見つめる瞳は真剣そのもの。その笑みは、自信に満ち溢れている。――どうせ無理だ、と思っている自分とは違って。
まるで、自分以上に自分を信じてくれている……そんな気さえした。
冗談半分で俺に告白させようというわけじゃないんだ――それを痛いくらいに悟った。
そのときだった。
「安心しろよ、鈴木!」と、いきなりよっちゃんが声を上げて立ち上がった。
びくっとして振り返ると、よっちゃんが胸に拳を叩きつけ、大きな口を豪快に開けたところだった。
「俺ら、徹夜して作戦考えたんだからよ。なあ、はるちゃん!?」

「おうとも」とモヒカン頭のはるちゃんものっそりと腰を上げる。
「昨日は悪かったよ。勘違いだったみてぇでよ。俺らも反省してんだ。だから、俺らにも協力させてくれよ。なあ、白井さん？」
「ああ」と長髪の白井さんも他の二人に続いた。「よっちゃんがお前に恩があるってんだ。俺らにできることはなんでもしてやるよ」
「……」
佇む不良三人組。弱さなど一切感じさせない男気溢れる立ち姿。信念という燃え滾る炎を宿らせた瞳。
時代の流れに逆らう長きリーゼントを支えているのは、その根性なのか。恋するラガーマン、よっちゃん。
わびさびさえも感じさせるモヒカン頭。怒れる拳を持つ男、はるちゃん。
もしかしたら、そこまで馴染めてないのかもしれない白井さん。
そんな不良三人組を前に、鈴木は震えていた。恐怖からではない。感動していた。なんて頼もしいんだ。言葉一つ一つに魂を感じる。誠意を感じる。
皆、真剣なんだ。生半可な気持ちじゃあないんだ。中途半端だったのは俺だけ。皆、こんな俺を信じてくれて――
胸にぐっとくる、この熱いものはなんだろうか。
「俺、がんばります！」
気づけば、鈴木は叫んでいた。
わあ、と熱い熱気とともにあがる声援。
鈴木はよく分からないやる気とテンションにのまれつつも、「ありがとうございます！」と不良たちに頭を下げていた。
今日こそは、男になれる。そんな気がしていた。とうとう、平均的な自分から卒業できる日が来たのだ、と言い知れぬ自信に満ち満ちていた。
「じゃ、さっそく打ち合わせをしようか」
曽良はぽんと手を叩いて、眩いほどの笑みを浮かべた。
そして、とうとう『泥舟タイタニック作戦』の全容が明らかにな

るのだった。

非日常的な告白作戦

「砺波が来たらね、このラガーマンズ三人組が『よぉ、姉ちゃん、かわいいじゃねぇか』とか言って砺波に絡むから。そこを偶然通りかかった殿が止めに入って、ラガーマンズを少林寺拳法的な動きで撃退。で、超告白タイム！　ということで」

さらりと『泥舟タイタニック作戦』の概要を説明した曽良。周りでは不良三人組が歓声をあげている。

ただ一人、鈴木だけは呆然と突っ立っていた。

なんてことだ、と驚愕していたのだ。

「徹夜で……」

徹夜で、ここまでありきたりな作戦を思いつくなんて――もはや、理解不能で鈴木は頭を抱えた。

しかも、超告白タイム、てなんなんだ？　一番大事なところがあやふやなのは、なぜなんだ。

「どう、殿？　気に入った？」

しかし、曽良は自信満々だ。ケチをつけるのも気がひけるほどに爛々と輝く瞳で見つめてくる。自分が女子だったら、赤面して昇天しているところかもしれない。

「あのぅ……」

言いづらい。

『徹夜で勉強したって、逆効果なのに』と、夜食を手に囁いた母の愛にようやく気づけた。

「んだよ、鈴木？　文句あんのかよ？」

鈴木の異変を察したようだ。よっちゃんが恐ろしい目つきで睨みつけてきた。

「ありません！」

瞬時に姿勢を正して屈服する、この潔さである。

「だよな。ぜってぇうまくいくぜ」

「はぁ……」
「元気ねぇなぁ！　気合が足りねぇよ」
そうは言われても、ここまでテンプレ全開の作戦を自信満々に披露されては不安にならないほうがおかしいというものだ。
「大丈夫だよ、殿！」いきなり、視界にイケメンの笑顔が飛びこんできた。「思いの丈をぶつければいいだけさ」
眩いほどの無邪気な笑み。綺麗な顔立ちの中にも、愛らしさがあって……なるほど、女の子たちが夢中になるわけだ。今さらながら、しみじみ思う。
つい、見とれていると、
「はい」と、曽良は二枚の紙っぺらを差し出してきた。「映画のチケット。渡しておくね」
「チケット？」
――映画観る約束しといたんだ。大丈夫、砺波は必ず来るよ。タダ券がある、て言っといたから。
曽良の言葉が脳裏をよぎった。
「タダ券って、本当だったんですか」
「そこは嘘なんだけど」苦笑して、曽良はチケットを鈴木の手に握らせる。「砺波の好きそうな映画、探しといたんだ。告白ついでに誘うんだよ」
「……」
わざわざ、買っておいてくれたのか。鈴木は手の平に押しこまれたチケットに視線を落とす。
砺波の好きそうな映画。そう思うと、胸が高鳴った。
「『ゴリラの惑星』？」
「うん。ゴリラが支配する惑星に迷いこんだ宇宙飛行士の話なんだ。最終的に、そこが地球だった、ていうオチでびっくりするよ」
「へえ、そうなんですか」観たいなぁ、と言いかけ、鈴木ははっと

した。「って、どんだけ、心の準備させてくれちゃったんですか！？」

「ああ、それと」思い出したように切り出して、曽良は人差し指を鈴木の鼻先につきだす。「砺波の好きなタイプ、聞いといたんだ。黒髪短髪、地味な男の子、て言ってたよ」

おお、とどよめきが起こった。

「それ、お前じゃねぇかよ！？」と、よっちゃんが鈴木の背中を叩く。

「ああ。こいつしかあてはまらねぇよ」

「意外とイケるんじゃねぇのか？」

不良たちのテンションも最高潮だ。

鈴木の心臓も浮き足立っている。

「た、確かに……」

ごくりと生唾を飲み込んだ。

まわりを見回してみろ。地味とは程遠いスーパーイケメン、長髪のちょいイケメン、リーゼントにモヒカン頭。

黒髪短髪、地味な男の子……自分しかいない。

「って、まわりがおかしいだけだーっ！」

順調に感覚が麻痺してきていることに気づいた瞬間だった。

「それじゃ」ひょいっと手を挙げ、曽良はさわやかに微笑みかける。

「俺は砺波に見つかるとまずいから、遠目から見守ることにするよ」

「え？」

「あとは頼んだよ、ラガーマンズ」

「ふん」よっちゃんは腕を組んで鼻を鳴らす。「さっさと行け」

「そうするよ」よっちゃんの反応を楽しむかのように、曽良はクスクス笑う。「じゃ、またね。殿」

敬礼でもするかのような仕草で別れを告げ、軽い足取りで去っていく。その背中を見つめながら、鈴木は心細さを感じて顔をしかめた。

そんな鈴木の変化に気づいたのだろうか、よっちゃんは急に渋い

表情を浮かべて、「鈴木よぅ」と語りかける。
「人生なんてよ、流しそうめんみてぇなもんなんだよ」
この不良はいきなり何を言い出した？
鈴木は思わず、「は！？」と不躾な態度で聞き返していた。しかし、よっちゃんは気にする様子もなく、眉間に皺を寄せ、遠くを見つめる。
「チャンスはいつだって流れてる。つかむかどうかは、お前次第っ！」
「……！」
鈴木は目を見開き、唖然とした。
心が奮えた。よっちゃんの言葉、その力強さに圧倒された。
「よ、よっちゃん」と、不良たちの感動の声も聞こえてくる。
「だろ？」にやりと口角を上げ、よっちゃんは鈴木に視線を向ける。
「それが、『Ｙｅｓ（そう）、男（メン）』ってもんじゃねぇか」

非日常的な告白作戦（後書き）

表紙絵を頂きました！　第一部に載せさせていただいています。
とてもキレイでかわいらしくて素敵なので、是非っ！

Yさま、ありがとうございました（＾＾）

明らかにアホなことを言っている。リーゼントがしたり顔でくだらないダジャレをぶっぱなした。

それだけだ。それだけのはずなのに……なのに、なぜだろう。なぜか、感動していた。

鈴木は胸の奥で燃え盛る熱い『何か』を感じていた。

力が湧いてくるのだ。やる気がみなぎる。得体の知れない自信がふつふつとこみあげてくる。

これは……よっちゃんの言葉が火をつけたこれは、まさか――

「お前も、感じてるんだな」

ポン、と鈴木の肩に手を置き、さらりと髪をはらう白井さん。にやりと浮かべた笑顔は、どこか惜しい。

「そう。それが男気だ！」

ぐっと親指を見せ、モヒカン頭、はるちゃんが続いた。

「お、男気……これが？」

得体の知れない力を手に入れた勇者のように、鈴木はその両手を見つめた。震えているのは怖いからではない。

「武者震い、だなぁ」

くつくつ笑って、はるちゃんが鈴木の肩に手を回してきた。

白井さんとはるちゃんに挟まれているこの状況。これまでの鈴木なら、失神でもしているだろうが、今は違う。――なぜなら、今、鈴木には男気が宿っている。

――チャンスはいつだって流れてる。つかむかどうかは、お前次第っ！

よっちゃんの言葉を心の中で反芻し、瞼を閉じる。

チャンス。

そうだ、これはチャンスじゃないか。『平均的』な自分におとずれた、一世一代のチャンス。

思い出せ。どうして、砺波に告白したいと思ったのか。

曽良とよっちゃんが首をつっこんできたから？　いや、違う。もともと、自分は告白する気だった。――少なくとも、告白したいと思っていた。

冷静になって考えてみれば、曽良たちのお陰じゃないか。どれほど『泥舟タイタニック作戦』がありきたりで救いようがなくとも、彼らがチャンスをくれたことに変わりはないんだ。彼らが居なければ、ただの妄想で終わっていたはずだ。砺波に声をかけることもできずに終わっていた。このまま、中学生活も『平均的だった』で終わっていた。

よっちゃんの言うとおりだ。

チャンスが流れてきたんだ。――『平均的』だった自分から卒業するチャンスが！　だったら、男としてやるべきことは一つ。

ぐっと拳をつかんで、鈴木は目を見開いた。

「つかんでみせます！　このそうめん」

「そうと決まれば、アレだな」とよっちゃんは両脇のはるちゃんと白井さんの肩に腕を回す。「男気フォーメーションだ」

「おおっ！」

はるちゃんと白井さんの威勢のいい声があたりにこだまする。

「お……男気フォーメーションって、これは――」

円陣だ！

気づいたときには、鈴木は不良たちの輪に加わっていた。

「お前ならやれるぜ、鈴木」

「藤本砺波にガツンとかましてやれ」

肩にのしかかるはるちゃんと白井さんの腕が重い。まるで、彼らの想いを象徴するかのように。

「鈴木、気合いれんぞ」

よっちゃんのその低い声が地響きでもおこしそうだった。

鋭い眼光がまぶしい。不敵な笑みがたくましい。そのリーゼントはぐりぐりと迫り来るようだ。

「はい！」

鈴木は腹から声をしぼりだして応えていた。

なんてことだ。ただの不良だと思っていたのに。ずっと、彼らに近づかないようにしていたってのに。

がたいの大きい男三人と組む円陣は、姿勢としては苦しいものがあったが、それでも精一杯、一員になろうとしていた。

「鈴木、男になれよ！」

よっちゃんのかけ声が、その場に……いや、きっと、公園中に響き渡っている。

「はいー！」

負けじと鈴木は声を張り上げる。

「まだ足りねぇ！」と叱咤が飛ぶ。「腹から声だせ！」

「はい！」

「まだ足りねぇよ、もっと出せ！」

「はいー！」

「まだ足りねえって！」

「すみませーん！」

「おら、もっと出せー！」

「はいー！！」

「もっと出せって言ってんだろー！」

「は……」

かたく瞼を閉じ、喉から血がでるほどに声をしぼりだそうとした——そのときだった。

「昼間っからなにしてんのよ！？」

天までも貫くような甲高い声が響き渡った。

円陣が乱れる。

咄嗟に振り返るよっちゃん。

散らばる不良たち。

そうして、開かれた鈴木の視界。そこに立っていたのは――

鈴木は息を呑んだ。

太陽の光はまるで神の祝福のよう。

風までがはしゃぎだし、どこからか桜の花びらを運びこんできた。

それは桃色の羽衣となって、神々しい天女のような少女をつつみこむ。

深みのある大きな黒い瞳は凛々しく純真で、ふっくらとした唇は小さく愛らしい。清純そうな顔立ちの中に宿る子どものようなあどけなさ。ひらひらなびく聖域へのカーテン――いや、紺色のスカートは、反則的な短さで男心を焦らして止まない。

その場にいる全員の視線を奪い、堂々たる風格で佇む気高きその様。

鈴木は動けずにいた。彼女の魅力に、心と一緒に魂までも奪われてしまったかのようだった。

「藤本……砺波」

誰かがその名を漏らしていた。

ふっと春風の囁きにも似たため息が聞こえた。藤本砺波はウェーブがかった髪をふわりとはらうと、

「三年間の置き勉がつまった鞄よ！」パンパンにつまった鞄を掲げ、宣戦布告でもするかのように声を高らかにあげた。「その空っぽの頭に教養ってやつを直接叩きこんであげるわ」

誰一人として、反応できなかった。単純に、砺波の言動が理解不能だった。

砺波がその鞄をよっちゃん目がけてふりかぶるまでは――

「こんな貧弱な奴から金巻き上げて何が楽しいのよ、このゴリラ！」

「金って、なんの話――ぐわぁっ！？」

中学生が持てる全ての知識がつまった鞄が、ゴリラの……いや、よっちゃんの顎に直撃した。響き渡る鈍い音――それが、出航を前に沈みゆく『泥舟タイタニック』の汽笛であることなど、鈴木には知る由もなかった。

非日常的な天使（後書き）

すみません、２０００字をオーバーしてしまいました。どうしてもこれ以上省略できなくて……砺波登場の回ということで、お許しください（＜＿＞）

非日常的な誤解

「何しやがるんだ、藤本砺波!?」
「学園のアイドルが番長はったおしていいのかよ!?」
倒れたよっちゃんを囲み、はるちゃんと白井さんが砺波を睨みつけた。
砺波はそんな不良の視線ももろともせずに、「ふん」と鼻で笑って髪をふわりとはらう。
「アイドルにはったおされて本望じゃないの?」
「んだとぉ!?」とはるちゃんは拳を握り締め、立ち上がった。「あまりに可愛いからってなんでも許されると思うなよ!?」
「てゆーか!」
砺波はびしっと人差し指をこちらに向けた。
って、こちら? 鈴木はようやく我に返ったようにハッとした。
「こいつに金返しなさいよっ!」
「はい!?」
金? 思わぬ言葉が飛び出して、鈴木は目を見開く。
どちらかというと、そのセリフはこの二年間自分が砺波に言いたかったものなのだが。
「金だぁ!? 何の話だよ!?」
はるちゃんは青筋立てて、今にも砺波に殴りかからん勢いだ。嗚呼、怒れる拳と逆立つモヒカンが震えている。
「そういや、さっきも金がなんだと言ってたな。なに、因縁つけてやがる?」
白井さんが冷静に参戦する。その手に支えられえているよっちゃんは意識が朦朧としているようだ。あごを押さえて唸っているのみ。
鈴木は未だかつてない『非日常的』な状況に自分が置かれていることに徐々に気づき始めていた。——いや、それは曽良と出会ったあの日からかもしれないが。

「因縁ですって!?　そっちこそ、なにとぼけてるわけ!?　こんなすぐ金くれそうな見た目の奴つかまえて、金ふんだくって楽しいわけ!?」

そうか、自分は『金くれそうな見た目』なのか。

なるほど。二年前、学園のアイドルが自分に話しかけてきた理由がようやく分かった気がした。

鈴木はちょっと泣きそうになりながらも、「すみません!」と震える声で横槍を入れる。

「あ、あの……ふ、藤本さん、ご、誤解が……」

砺波の澄んだ大きな瞳がこちらに向けられた。

目が合い、どきりと鈴木の胸が高鳴った。

あの藤本砺波の視界に自分が入っている。それだけで、鈴木は感動すら覚えていた。この二年間ずっと、彼女の死角から憧れの眼差しを向け続けていたのだから。

「なによ?」

しかし、その唇から放たれたのはなんとも不機嫌な声。想像していたものとは——春の陽気にはしゃぐ小鳥のような声とは、かけ離れている。

鈴木はたじろぎつつも、「ご、ご、誤解があるようであります」と士官のように姿勢を正して報告した。

「誤解?」

「は、はいっ!　あの、別に金をふんだくられていたわけでは……」

「なに言ってんのよ!?　ちゃんと聞こえてたんだから。『まだ足りない、もっと出せ』とかなんとか」

「あ!　いや、それは……その気合ですっ!」

「はあ!?　気合いですって?」

砺波の苛立った甲高い声が響き渡った。

疑るような表情で睨みつけてくる。

鈴木はもはや砺波を直視できなくなって、視線をおろおろと泳がせていた。

「そうさ、気合いを入れてやってたんだよ」
どうだ、参ったか。――そう言いたげな声が聞こえて、鈴木は振り返った。
視線の先で、まるで矢で射抜かれようと沈まなかったというかの武蔵坊弁慶のように、勇ましく立ち上がるリーゼント・ラガーマンの姿。
「よっちゃん！」
安堵が混じった歓声が上がる。
思わず、鈴木もそれに混ざりそうになって思いとどまった。
そこは越えちゃいけない、戻れなくなるぞ。そんな声が聞こえた気がした。
「はは～ん。なるほどね」
ややあってから、砺波が悟ったようにつぶやいた。
ちらりと目をやれば、砺波はにんまりと怪しく笑んでいる。そのふっくらとした頬は、痙攣でもしているかのようにぴくぴくとしているが……。
「さては……チクったらふるボッコにしてやるとかなんとか言って、脅したのね！」
ちがーう！
鈴木はそう叫んで逃げ出したくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6325r/

鈴木くんの平均的な非日常

2011年11月2日03時10分発行